

## 私の代わりに犯されてもらえますか

サークル小患者

### 一．痴漢

警笛のドップラー効果を残して、電車がホームに滑り込む。朝のラッシュ時の恒例、すし詰め列車の到着だ。秋川汐織あきかわしおりの長い黒髪がふわりとなびいた。風圧で捲れそうになるスカートを軽く押さえる。

最優先課題は、乗り損なわないことだ。さもないと、アルバイトに遅刻してしまう。次に、可能な限り安全なポジションを確保すること。特に怪しい男性客に囲まれないよう気をつけないと、十九歳の若い女体は格好の標的になる。

ドアが開き、どやどやと人の群れが掃き出された。ここは乗換駅なので、かなりの人数が降りる。それ以上の乗車客と入れ替わるので、混雑はひどくなるわけだが。

降車客が降りると同時に、一斉に列が動く様子は、訓練された軍隊のようだ。汐織は緊張した面持ちで、前の人にびったり着いて乗り込んだ。もみくちゃにされながら、少しでもいい位置を目指して足掻く。

やがて電車が動き始めた。戸袋から連結器側にやや入った位置に立った汐織が息をつ

く。まあ、悪くない。

子狸のような目がくりくり動く。美人と言うより、可愛いタイプの顔立ちだ。つり革はつかみ損ねたが、苦痛な体勢ではなかった。背中に乳房が当たっている、と言うことは後ろは女性だ。前も同年代の女性。

それにしてもボリュームたっぷりの乳房だった。恐らくは九十センチ超。その乳房が、軟体動物みたいにぐりぐり密着して来るのだから、痴漢に走る男性の気持ちに分からないでもない。汐織はそんな事を思いながら、自らも前の女性に身体を預けた。変に突っ張るよりも、力を抜いて流れに任せた方が楽である。

二駅ほど過ぎた時だ。汐織はスカートの裾が不自然に動くことに気づいた。確認したくても、押しくらまんじゅう状態では、身動きもままならない。

—— 痴漢!?! ——

汐織の心臓がドキリと跳ねた。いや、もしかしたら盗撮かもしれない。汐織は両脚のスタンスを狭めてガードしたかったが、竹林のごとく乱立する脚また脚に阻まれて動けなかった。

(くっ……)

内腿をさわりと撫でられた。汐織が悲鳴を飲み込む。やっぱり痴漢だ。尻を振って逃げようとしたが、無意味だった。更に乳房にも手が。ゆったりとしたカットソーの下から手

を入れられたようだ。

(んひっ……)

指先にブラジャーを引っ張り下げられ、左の乳房がこぼれ出た。即座に乳首を摘ままれて転がされ、喉から「ひゅう」と変な息が漏れる。こんな所で声を出したら、いい晒し者。痴漢されている女として、周囲の好奇の目を浴びる羽目になる。汐織は、声を上げまといと必死になった。

何度か痴漢されている女性の姿を目にしたことはあるが、一度も助けが入るのを見た覚えがなかった。つまり晒し者と同じだ。

乳首だけに気を取られているわけにはいかない。スカートの中に入った手が、下着の股の部分でずらそうとして動いていた。汐織はストッキングがまとわりつく暑さが嫌いで、冬以外は生足だった。可能な限りきつく脚をより合わせ、不埒な手からガードしようと頑張るが、簡単に隙間から下着の内側に侵入されてしまった。

(くろう……)

指先が陰裂の長さを測るように、下から上まで往復した。ワレメを浅くなぞられて、背中がブルッと震える。

(嫌っ)

汐織は顔を真っ赤にして屈辱に耐えていた。指先が恥毛が生えている範囲をまさぐり、陰裂に沿って下って土手のヘリをさする。そして、今朝の獲物は陰裂の頭を中心とする狭

い範囲にしか恥毛がないことを確認した。

からかう如くに申し訳程度の恥毛を摘ままれ、汐織は唇を噛んだ。逃げ場所がないままに、尻を振って耐えるしか出来ることはない。

前の女性が鬱陶しそうに振り向いた。ちらと汐織の顔を見て、軽蔑したように息をつき、前を向く。自分以外の女がどうなるうが、知ったことではない。目がそう語っていた。

(ひいっ……)

ついに陰裂の内側に指が潜ってきた。クリトリスの三角フードの切れ目を探り、中の肉豆の感度を試すように突ついてくる。

こんな所でクリトリスを弄られたら。女の最も敏感な部分を弄られたら。汐織の額に汗が浮かんだ。

不埒な指先は敢えて女の急所を後回しにしたのか、陰裂の更に奥に侵入する。二枚の小陰唇の外側を溝に沿って数回、ニュルリニュルリとなぞられ、汐織は悲鳴をかみ殺した。膣穴をきゅっと締める。太腿もこれでもかときつく締める。しかし侵入した指は、汐織の努力を嘲笑うかのように蠢き続ける。

下半身に気を取られている間に、乳房を両方ともブラジャーからつかみ出されていた。敵は少なくとも二人。

汐織は前の女性の背中に顔をくっつけた。嫌がられたって構わない。恐らく座席に座っ

ている人からは、スカートの中に手を突っ込まれている自分の姿が見えているはず。カッ  
トソーをめぐられて生で乳房を揉まれていると言うことは、座って見上げれば丸見えだろ  
う。朝から痴漢されるお馬鹿娘。誰も彼もが素知らぬ顔で見物を決め込んでいるのだ。と  
にかく、顔を見られないようにしなくては。

陰穴を守る小陰唇の『蓋』は、いとも容易くかき分けられ突破されてしまった。尿道口  
を弄られ、息が止まりそうになる。痴漢の指先はひとしきり陰穴のごく浅い場所をまさぐ  
っていたが、じわりと上に登ってきた。

「くうっ……」

陰裂の内側で、クリトリスフードをめぐられた。汐織は、自分の肉豆が露出したことが  
分かった。ツン、と衝撃があつて太腿が震える。

たまらず、声が漏れた。慌てて手で口をふさぐ。指先が巧みに動き、クリトリス包皮を  
上にたぐり上げられる。

「んんっ！」

クリトリスを剥かれてしまった！ どうしよう、どうしよう!!

もう、頭の中は真っ白だ。そこへ『ピクン』と衝撃が。生クリトリスを摘まれたのだ。  
指先でクリクリと女芯を転がされた汐織が、地団駄踏んでもがく。

「あの、どうしたんですか？」

必死で悲鳴を押し殺している、耳元で声が聞こえた。汐織の背中に大きな乳房を押し  
付けていた女性だ。さすがに異常に気付いたのだろう。

「ああっ！ うううっ！」

反射的に首を回すと、目の前に二十五、六くらいの女性の顔があった。大丈夫なはずが  
ない。生クリトリスを勝手に転がされて気が狂いそうなのに。

「たす……くううっ！」

クリトリスを弄られる汐織が、藁にもすがる思いで女性の目を覗き込む。

くらり。二人の目が合った瞬間、時が止まったかのような静寂。女性の瞳が焦点を失っ  
て中空をさまよった。ゆっくりと三つ数えるくらいの間。そして時がまた動き始める。

汐織のスカートの中に入っていた手は、どこかに消えていた。乳房をつかんでいた手も  
同時に。

背後で息をのむ声。押し付けられた乳房がぐりぐりと動く。後ろの女性がもがいている  
のだ。振り返るまでもなく分かった。痴漢のターゲットが汐織からその女性に切り替わっ  
たのである。

汐織はうつむいて目を閉じた。難を逃れた安堵の表情はなく、口を真一文字に結んでい

た。

——ごめんなさい、ごめんなさい。  
何度も心の中で詫げる。

ゴトンゴトン。電車は走る。二駅過ぎても、三駅過ぎても、後ろの女性はひっきりなしに身体をよじっていた。時折「ひっ」と短い悲鳴が聞こえてくる。背中に当たった手が、忙しく動き続けていた。ちょうど胸の高さくらい、右と左の二カ所。後ろの女性は、乳首を摘まれているに違いない。不規則に床を叩くヒールの音も聞こえてくる。彼女のスカートの中には、痴漢の手が入り込んでいるはずだ。

大丈夫かしら。大丈夫なはずがないと分かっているけれども、やはり気になった。自分がされたこと、彼女がされているであろうこと。「くっ」「ひっ」と焦った息づかいが、間近に聞こえて来る。後ろの女性は、顔を汐織の背中にびったり密着させていた。忙しく腰を左右に振っては時々しゃっくりみたいに息を飲み込んでいる。

この反応……。きっと、女性器を弄られているんだわ。お気の毒に。汐織は心の中で呟いた。

自分が被害者でなければ、冷静にもなれる。そういうものだ。

私も、いとも容易くクリトリスを見つけられてしまった。彼女も同じ目に遭っているに違いない。場数を踏んだ痴漢？ だとしたら悪質だ。正に女性の敵。

横目に、座席に着いている人たちの表情が見えた。中年のサラリーマン、二十歳くらいのギャル、制服姿の女子高生。全員が目が、汐織の後ろに注がれていた。無表情に痴漢されている女性の姿を見物している様子は、不気味にすら思える。

途中のターミナル駅で、周辺がかなり入れ替わった。混雑は限界に達し、押し押されずるうちに汐織は一番奥の連結扉際に追いやられた。例の女性と痴漢も一緒だ。

ただ体勢が入れ替わって、汐織は女性と向き合って立つ形になった。  
女性はブラウスのボタンを外され、胸元が開いてしまっていた。視線を下に向ければ、嫌でもブラウスの中の状態が目に入る。ブラジャーのカップの上側にあふれ出し、こんもりと盛り上がった大きな乳房。その乳房が目の前で揉まれ、乳首を摘まれて転がされていた。

女性の顔がすぐ前だ。艶っぽい細面が屈辱にゆがんでいる。直視できずに下を向くと、蹂躪されている下半身が見えた。スカートの下に手が二本入って動いており、裾が持ち上がった太腿が露わになっていた。スカートを捲り上げられた状態だ。

女性は頭を汐織の肩に預け、荒い息をついていた。軽くカールしたセミロングの髪から、シャンプーの香りが漂う。「うっ、うっ」と悲鳴を押し殺しながら、ひたすら屈辱に耐えている様子だった。

この電車は通勤快速なので、先程のターミナル駅を出ると終点まで止まらない。所要時

間およそ十五分。無理矢理にせよ、女がそれだけの間性感帯を弄られ続けたら……。スカートの中に入っている手は二本。弄られ放題の有様だ。

クリトリスも、穴も、乳首も。あのまま黽られる自分の身を想像してみる。我慢し続けるなんて無理。断言してもいいと思った。こうなったら最後、理性だけは失わないように頑張り抜くしかないのだ。それしか出来ることはないのだから。

この女性もそうなるのだろうか。お気の毒に。そしてごめんなさい。それしか言葉がなかった。

痴漢される女性の熱い吐息が、カットソーの布地を抜けて肌に当たる。呼吸が速くなってきたのは、五分ほど経った頃だ。ビクンと身体を突っ張らせる頻度も上がっていた。

汐織は、女性の乳首の先が濡れていることに気が付いた。乳汁だ。乳首が硬く尖り、乳暈ごと持ち上がっている。乳首を転がされ、白い液体を細い糸のように飛ばす。下ではスカートの前が捲れ上がっていた。白い下着とパンストを腿のあたりまでずり下げられており、もやっと黒い恥毛が確認できた。その恥毛が、痴漢の指の動きに合わせて、そよぐように動く。

汐織は指先が潜っている位置を見て、女性がクリトリスを弄られている真っ最中であることを知った。陰裂の正面から指が二本、『刺さって』いた。人差し指がワレメの頭を引っ張り、包皮を剥くと同時に肉豆を起こして押さえる。指先が剥かれたクリトリスを、こ

ってりと可愛がる。見ているだけでムズムズしてきそうな指の動きだった。

この女性の姿は、汐織がそうだったであろう姿とイコールだ。あのまま弄られていれば、今頃はイカされていたはず。そんな気がした。

汐織は何度も女性の状態を盗み見た。申し訳ないと思うけど、気になって仕方がない。目をやるたびに見えるのは、徹底的にクリトリスを狙いうちに弄られる姿。指が上に向かって動く、陰裂が引っ張られて『具』が覗く。真上から見る女性の肉豆は、充血して大豆ほどの大きさに膨らんでいた。痴漢の指先が小陰唇の合わせ目の下に潜り、剥いたクリトリスを裏筋から弄っているのだった。

ほどなくビクンビクンと女性の身体が痙攣した。喉の奥から「ヒュウ」と息を吐いて天井を仰ぐ。とうとうイカされたようだ。終点まで、まだしばらくあるのに。

一度イカされた女体は、耐性がガクンと落ちる。ちよつとした刺激でまたイッてしまう。それを狙ってか、痴漢の指は休むことなく蹂躪を続ける。

「くふっ：あふっ」

女性が頭を振りながら汐織の身体にしがみついていた。瞳の焦点が外れたイキ顔。下の方から、クチュクチュと湿った音が聞こえてくる。音の発生源が膣穴だということくらい、言われなくなっただけで分かった。背後の男に膣穴に指を突っ込まれていると思われた。

「あの、大丈夫ですか」

「ひっ：くひい：ふあっ」

汐織は声をかけてみたが、聞こえていないようだった。聞こえていても返事出来る状態じゃないだろうけど。

クリトリスも膣穴も。こんなの、我慢出来るはずがない。

「ふあああっ：」

女性の身体が反り返った。

汐織は女性の顔を見つめた。満員電車の中ではしたなくヨダレまで垂らしたアへ顔。女性器を弄くり回され、イキ地獄に落とされたメスの顔。

「ああああっ」

耳元に直にメスの吐息を吹き込まれ、自分まで変になってしまっそうだ。

ブラウスの開いた胸元から大きな乳房がボロンとこぼれていて、尖った乳首の先は両方もも乳汁にまみれて光っていた。

やがて、女性は力が抜けて反応しなくなった。失神してしまったようだ。汐織は女性が倒れないように、支えなければならなかった。

生乳房が腕に密着する。どうしたらいいんだろう。

終着駅に到着し、車内ががらんどろになってても、汐織は女性にしなだれかかられたままだった。

こんな目に遭って気の毒だ。汐織はボロンとこぼれた乳房をブラジャーの中に戻してや

った。

どうしたものだろうか。電車の床には、女性の膣穴から分泌された白っぽい液体が飛び散っていたが、始末している暇はなさそうだ。時計を見て少し考える。仕方ない、今日のアルバイトは遅刻しよう。汐織は女性に肩を貸して、駅の事務室に向かった。こうなったのは、自分のせいでもある。

駅員に事情を話して、仮眠ベッドに女性を横たえる。仰向けにした途端、胸元から大きな乳房がゆざりとこぼれ出た。さっきは気付かなかったけど、背中側のブラジャーのホックが外れているみたいだ。乳汁に濡れた乳首がトクントクンと脈打っている。

しばらく待っていると、近くの病院からナースが駆けつけてきた。到着するなり、何のためらいもなく脚を広げさせてスカートをまくり上げる。

いきなり同性の性器を目の当たりにした汐織は、座ったまま硬直してしまった。こんなに濡れていたのかと驚くほどにお汁まみれの膣穴。陰裂から頭を出した、勃起したクリトリス。陰裂の縁の恥毛が、糊で固めたように皮膚にへばりついていていた。

「あー、やられちゃってるねー」

まだ若いナースは、女性の陰裂をかき広げて膣穴に指を突っ込んだ。

「弄られただけかな。犯されてないね」

これが痴漢に罵られた女の『惨状』。

当たり前のような顔をして、膣穴からお汁を掻き出し始めたナースに、汐織は言葉も出

ない。クチュクチュ、ピチャピチャ。駅構内の喧噪を離れた室内に、卑猥な音が大きく響いた。開かれた大陰唇の内側にぼつてりと脂の乗った小陰唇が見えていて、ナースの指先に絡みつくように動く。

「お友達？」 ナースが汐織に顔を向けた。

「いえ、居合わせただけです。その…放っておけなくて」

「なるほど。この人、クリトリスを可愛がられちゃったんだね。こんなに充血しちゃって」

ナースの指先が、女性のクリトリスの根元を押さえて起こした。見えていた部分の倍ほどもある肉豆が、プリンと剥けて露出する。

「…お気の毒なほどに」 汐織は言葉を濁した。

「見ちゃったの？」

「はい…すぐ横にいたので」

「そっか。お乳も出ちゃってるし、イカされ地獄ってところかな」

「…」

「女はここを弄られたら終わりだからねえ」

ナースは指の腹で尿道口を押さえ、指一本で剥いた包皮が戻らないように器用に押し上げながら、脱脂綿で女性のクリトリスを軽く拭いた。ほとんど意識がないはずの女性の太腿が、ピクピク震える。

汐織は女性の口が半開きになって喘ぎ声を漏らす様子を黙って見ていた。栓をされた尿道口からジワリと小水が漏れてシートに小さな水たまりを作る。

クリトリスに触れられてから一呼吸遅れて膣口がキュッと収縮し、弛緩した際にトロリと淫汗が溢れ出た。女性はいい夢でも見ているようで、気持ちよさそうだ。

「こ、こういうことって多いんですか」

汐織は頭がボーッとしてきた。

「痴漢される女性は多いと思うわよ。腰抜かしちゃう人は…そうねえ、月に二、三回はお呼びがかかるかな。特に通勤快速は運が悪いと三〇分も弄くらればなしだから、女殺し快速」

「そんなに」

「中出しされて、警察を呼びましょうかってケースもあるし。女子中学生から若奥さんまで色々」

「…」

「ま、十人中九人は呼ばないで言うけどね。この人はよく耐えた方よ、だって失禁してないもの。クリトリスを弄られた女は、若い子ほど膀胱が空っぽ」

「…：：：：：そうなんですか」

汐織はうなずいた。電車の降り際に床に拡がる『水たまり』を見たことは、一度や二度ではない。『水たまり』にとろりとした粘液が混じっていたら、そこで女がイカされてい

た証明だ。

「電車の床、トロトロだったでしょ」

「ええ：真っ白」

「やっぱり。ま、無理矢理弄られた女に罪はないわ」

ナースはスマホを取り出して病院と連絡を取り、病室の空きを確認した。女性をしばらく休ませる判断をしたようだ。

「それじゃ、私はもういいですか」 汐織が立ち上がった。

「病院のスタッフが担架持ってくるから大丈夫。ご苦労様」

立ち去り際にもう一度振り向くと、ナースが臍穴に指を二本突っ込んで洗浄を始めていた。

ああなるのは、私のはずだった。ここでナースに手当てされるのは私のはずだった。本当なら、あなたが失神してしまった私をここに運んでくれるはずだった。

—— ごめんなさい。

汐織はまた、心の中で詫びた。

## 二、因縁

「ええっ、あんた痴漢されたの!？」

その日の夜。リビングで朝の刺激的な出来事について漏らしたところ、妹のこずえが身を乗り出してきた。

こずえは高校三年生。茶髪のボブカットがよく似合っている。姉の汐織とは対照的に、好奇心のままに突き進むタイプ、悪く言えば軽く見られがちな今時娘である。汐織のことを生意気にも「あんた」と呼ぶ。ちなみにバストサイズは八十六センチで、すでに姉を上回っている。姉妹は親元を離れ、マンションで生活していた。

「わ、私じゃないわよ。知らない女の人」

汐織が口を尖らせた。自分だって陥落寸前の有様だったのだが、そんな事を告白するつもりはない。

「へえ、そうなんだ。あの時間ってメッチャ混むし、囲まれたら終わりだよ。弄られ放題って感じ。で、どうだった？」

「どうって……痴漢されちゃったのよ。女の人が目の前で。それよりこずえ、女の子がそんな事に興味を持ったら駄目でしょう」

「いいじゃん、他に誰かいるわけじゃなし。その人、感じてた？」

汐織は曖昧にうなずいた。黙っていればよかったと後悔したが、もう遅い。こずえは情



報をすべて引き出すまで、食い下がってくるタイプだ。

だから汐織は追及されるまま、例の女性の痴態を全て話す羽目になった。

「終点までクリと穴を同時攻めかぁ。それやられたら、あたしだって意識飛ぶわ。しかもオッパイ出されてたんでしょ。かわいいそー」

こずえは痴漢された女性に表面だけは同情的だった。内心面白がっていることは見え見えだ。

「言いふらしたら駄目よ」

「分ってるって。あの路線で痴漢された子、うちのクラスにもいるよ。マンコ弄られて腰抜けちゃってさ、三時限目にやっと登校した子。クリ狙われた上に穴にも指入れられたみたいだよ。バーজনだったらヤバかったよね」

汐織はこずえの話しぶりから、すでに男性経験があるのではと思った。姉の責務として、妊娠と性病にだけは気をつけるよう言い聞かせておかなくては。自分の身は自分で守るしかないのだ。前から言おうと思ってタイミングがつかめなかったけど、ちょうどいい機会だ。

「ところでこずえ……」

「さーて、ひと風呂浴びてこようかな」

お説教の雰囲気を感じたらしいこずえは、さっさと逃げてしまった。取り残された汐織がため息をつく。

「……勘だけは鋭いんだから」

汐織はテーブルの上を片付け、自室に戻ってPCの電源を入れた。寝る前にメールチェックでもしておこう。

PCが立ち上がるのを待って頬杖をつく。脳裏によみがえる、生々しい痴漢現場。あの女性は乳汁が出てしまっていた。もし自分があのまま痴漢され続けていたら、どうなってしまっただろう。

あんな風にならずに済む自信はなかった。おそらく、いや間違いなくあの女性と同じ姿を晒していただろう。満員電車の中でイカされ、腰が抜けて立てなくなって。自分の惨めな姿を想像して、じゅんと膣穴を湿らせる汐織であった。

妄想を追い払い、メールソフトを起動する。何通かのメールが届いていたが、半分はスパムだ。手際よく必要な分だけ選別して、残りは開くことなく削除する。

「……また来てる」

差出人名を目で追う汐織の表情が曇った。ある事件をきっかけに絶縁状態になった高校時代の友人、前沢奈那からだった。

『ぼーか！ あんたなんか犯されちゃえ！ 犯されちゃえ！ 犯されちゃえ！ 犯されちゃえ！ 犯されちゃえ！ 犯されちゃえ！ 犯されちゃえ！』

文面はそれだけ。いつもと同じだ。隠れもせず、堂々と自分のスマホからストレートな敵意をぶつけてくる。



腕を組む。端正な顔立ちだが、今ひとつ垢抜けない残念感漂うあたりは高校時代と変わらなかった。

「飲んでるの？」

「大きなお世話」

顔が赤いのは汐織と会ったせいばかりではなさそうだった。

「……」

奈那と目が合った瞬間、汐織の脳裏にあの時の光景がフラッシュバックした。

耳をつんざくような金切り声で叫ぶ奈那の顔。男たちにスカートを捲り上げられ、引きずり下ろされる白い下着。柔らかな恥毛が扇状に生えた、ぽっこりとした恥丘が露出する。下手すれば蹴飛ばされそうな至近距離で、猛烈に暴れる二本の脚。脚の付け根を縦に走る深さのあるミゾが見え隠れしていた。恥毛が生えているのは陰裂の中程から上だけで、下の部分はツルンとしている。

白い太腿がこじ開けられ、ぴったり閉じていた陰裂がぱっくりと口を開ける。目の前で剥き出しになる『女一式』。男が大きく口を開けて、マンコにしゃぶりついた。奈那の呼吸が一瞬止まり、すぐに「ヒューッ」と甲高い叫びを上げる。

男に吸い付かれるマンコの向こうには捲られたスカートがあって、その陰に乳房をはだけようと動く手が見え隠れしていた。やがて外された白いブラジャーが見えて、汐織より二回りも小ぶりの乳房が露出した。ツンと上を向いた乳首もはピンク色だ。その乳首がた

ちまちま男の指先に摘まれ、慰みものにされてしまう。

処女穴を舐め回す男の鼻に押し上げられたクリサヤを別の男の手が摘まんで、中に収まった肉豆を剥き上げた。

あれだけ綺麗に剥けたクリトリスを見たのは初めてだった。いくら女性同士だって、他人の剥けたクリトリスを観察する機会なんてあるものじゃない。

——そう、あれは高校三年の秋の出来事。同級生はみんな知っている『前沢奈那輪姦事件』である。

「思い出しているんじゃないわよ、嫌らしい女ね」

奈那が鼻を鳴らした。勘の良さは当時と変わっていないようだ。

「……」

「自分じゃなくて良かったと思ってるんでしょ。あなたの位置から丸見えだったんじゃない？ あたしが輪姦で処女切られる瞬間がさ」

「……」

黙っていた方が得策だ。うっかり刺激したら更に恨みを買う羽目になりかねない。汐織はそう考えて、何も反論しない事にした。

「一番許せないのは、他人に喋った事。輪姦された話に尾ひれが付いて知れ渡っちゃってさ。あたしが卒業までどんな気持ちで過ごしていたか分る？」

「……」  
 喋ったのは私じゃない。校内であんな悲鳴を張り上げていれば、誰かが気付いて覗いていたとしても不思議はないではないか。何度もそう言ったのに。聞く耳を持たぬ相手を納得させるなんて、自分には無理だ。

「ふん、まただんまりなの」

酒臭い息を吹きかけられた。

「……ところであんたさ、何かの能力者だって言ってたよね」

汐織がはっと顔を上げる。

「思い出したのよ。一度だけそんな事を言いかけてごまかしたことがあったって」

「……」

「最初に男たちが襲いかかったのは、あんただだった。裸に筆られるあんたを助けようとしたら……何て言うのかな、頭の中がぐらっときて一瞬わけが分らなくなって。正気に返った時は何故かあたしが襲われていた。ずっと引っかかっていたのよね」

「……」

「あんたの能力は『他人を身代わりにすること』。違う？」

「……」

汐織の顔がみるみる赤く染まり、無意識に髪の毛をいじり出す。元友人である奈那が、凶星を指された時の態度に気付かぬはずがなかった。

「ふん、まれに超能力者がいるって聞いた事はあるけど、まさかあんたがそうだったとはね」

「……」

「自分の身代わりに輪姦されるあたしを眺めて爽快だった？ いい見物だったでしょ。あたし本気で抵抗したし、それでも押さえつけられて穴にチンポ突っ込まれたんだからさ。あたしが犯される姿を見てマンコ濡らしていたんじゃないの？ AV女優も真っ青の処女レイプシーンだもん。クリトリス剥き上げられて、乳首つままれて『ヒィッ、ヒィッ』って叫び通しでさ」

奈那がスカートの上から自虐的に恥部をポンポンと叩いて笑った。そしてくるりと身を翻す。

「……あたしさ、いい方法を思い付いたんだよね。覚悟して」

奈那は捨て台詞を残して去って行った。

ふうっ、と息をつく汐織。緊張の糸が切れた途端に膝がふらついた。

いい方法？ 最後の台詞が気になる。

奈那の目的は明白だ。私を自分と同じ目に遭わせること、それしかない。

「……嫌よ、あんな目に遭うなんて」

汐織はうそぶいた。

仮に奈那が男たちをけしかけて来たとしても、無力化は可能だ。奈那と目を合わせるだけ。実に簡単だ。惨めに犯される私の姿を見たいがための行動だから、奈那がその場にいらないなんてことはありえない。こっちは、奈那が『ミイラ取りがミイラになる』姿を尻目に逃げてしまえばいい。奈那の口ぶりだと、能力の発動条件までは分かっているように思った。

何を思いついたのか知らないが、こっちの防御は鉄壁。おそらく、アルコールが入って大口を叩いただけだろう。

その夜はなかなか寝付けなかった。瞼を閉じる度に、輪姦される奈那の姿が再生される。

—— 本当に自分の位置から丸見えだった。マンコを舐めていた男の頭が離れると同時に、これでもかとかき拡げられた陰裂の中身がてんでに弄られる。クリトリス包皮なんか、真っ先にめくり上げられて三角錐状の突起が剥き出しになっていた。ツルンと剥けたクリトリスも、容赦なく弄られる。処女膜まで丸見え。猛烈に抵抗する両足をがっちり押さえ込まれ、杭が刺さるみたいに、膣穴に肉棒がねじ込まれた瞬間。処女を破られた奈那が失禁して、床に水たまりが拡がっていく。奈那の尿道口から小水が噴き出すところま

でくっきりと見えていたのだ。

「……」

私がそうなるはずだった。惨めに輪姦される姿を、奈那に見られていたはずだった。

とっさのことで、仕方なかったのだ。意図してやったことじゃない。何度自分の中で言い訳しただろう。

はた迷惑な能力だと自分でも自覚している。でもこの能力のおかげで災難を免れてきたことはまぎれもない事実だ。奈那の件しかり、先日の痴漢しかり。

「もしあのまま私が痴漢されていたら……」  
乳首を弄りながら想像してみる。

身動き出来ない中、クリトリスを剥かれました。私。膣穴に指を突っ込まれるのは時間の問題だった。もちろん逃れる術なんかない。穴の中を掻き回され、同時にクリトリスと乳首を摘まれっ放しでイタズラされてしまったら。

「無理だわ、我慢出来るはずがない」

試しに下着の中に手を入れてクリトリスを刺激してみた。そっと触れただけなのにピクンと電気が走って、太腿が震える。快感信号が乳首と連動するかのよう増幅して思わず声が出た。

自分でするならば加減も出来る。でも痴漢は好き勝手に弄り回してくるはず。つまり、

終点まで弄られたまま。

私はイカされただろう。断言してもいい。あの身代わりになってもらった女性みたいに、膣穴からお汁を垂れ流し、乳汁を噴きながら声を上げまいと必死になっていたはず。もしかししたら終点まで持たずに、失神してしまったかもしれない。

駅の救護室に担ぎ込まれる私。スカートを捲り上げられ、赤の他人にお汁で白く泡立った女性器を覗き込まれる。考えただけで恥ずかしさと悔しきで血が沸騰しそうだ。あの女性の下半身の状態がまぶたに浮かぶ。

「……あの、よく終点まで立っていられたものだわ。あれで失禁しないなんて凄い精神力かも」

お汁まみれとは正にあのことだ。膣穴周辺は真っ白、太腿の内側もぬらぬら。電車の床にもお汁がたっぷり飛び散っていた。

自分は果たして我慢できるだろうか。膣穴にも指を入れて、穴・クリトリス・乳首の三点同時攻撃がどんなものか試してみたかったが、手が足りなかった。

汐織は顔を上気させながら下着を引き下ろした。膣穴をまさぐると案の定トロリと湿っていた。シャツをめくり、ブラジャーを片手で持ち上げて乳房を解放してやる。豊かな膨らみがゆさつと揺れて自由になる感覚が心地よかった。

見ると天井を向いて並んだ乳首が、片方だけ固く尖っていた。汐織がクスリと笑って、摘まなかった方の乳首をつつく。敏感な乳首は見る間にむくむくと膨らむのだった。

両乳首が同じ大きさになると、汐織はゆっくりと胸をローリングさせた。はだけた乳房が、ゆらりゆらりと一定のリズムで揺れ動く。汐織はこうして自分で乳房を揺らすのが好きだった。気持ちいい。

「あ……はあ……」

膣穴のごく浅い位置を鉤型に曲げた指先で刺戟する。乳房を交互に持ち上げながら、柔らかに揉み込む。汐織は膝に引っ掛かった下着をもどかしげに引き抜くと、大きく脚を広げた。

足下の鏡台にあられもない自分の姿が写った。いつもはびたりと閉じている陰裂が弾け気味になって、『具』が覗いている。汐織は大陰唇に指を添えて容赦なく掻き拵げた。剥き出しになる『女』。大粒のクリトリスがブリッと剥けて、存在を主張しているようだ。

「はあああ……」

白い指先が忙しく膣穴を掻き回す。痴漢の指先を想定して乱暴に抜き差しを繰り返しているうちに、腰がとろけそうな快感に襲われて怖くなった。それでも指先を動かす続ける。だって、痴漢は止めてなんかくれないから。

「くひっ……ううっ」

汐織は十九年の人生で一度だけ、能力を使えなかったことがある。中学一年の秋だった。

自分に妙な力があるらしいと先生に相談したところ、長ったらしい名前の研究機関に連れて行かれ、丸裸にされて調べられたのである。超能力のことを他人に漏らしたのは、この時と奈那だけだ。妹のこずえも知らないはず。

女子の場合、能力の源が子宮にあることが多いらしい。だから汐織は、恥毛の一本も生えぬマンコを開かれ、数時間にわたってくまなく調査される羽目になった。誰かを身代わりにしても、最初の段階で目隠しをつけられてしまい、手も足も出ないまま裸にされてしまったのだ。しゃにむに抵抗したけど、無駄だった。視界を奪われた中で下半身がすうっと涼しくなった時の絶望感は、はつきりと覚えている。

生まれて初めて他人の前でマンコを開かれた。それも引き攣る程に。ピンセットでクリトリス包皮をめくられ、触れられる衝撃で失禁してしまった汐織。処女穴の中にも、カメラがついた細い管を入られた。

クリトリスを断続的に刺戟され、恥ずかしくてヒィヒィ叫んでいたはずなのに、いつの間にか身体が熱くなっていった。クリトリスが張って張って、何度失禁しても尿意が収まらなかった。ろくに性の知識もない小娘が、仰け反りながらイッたのだ。クリトリスも処女穴も未発達の小陰唇も、全てが熱くしびれていた。

ヒクヒクと収縮しながら、とめどもなくお汁を垂れ流す十三歳の少女の膣穴。プチュッ、プチュッと大人の女と変わらぬいやらしい音を立て、白っぽい本気汁を溢れさせる。鏡のような検査テーブルの上は、お汁と失禁でびしょ濡れ。

「はあ……はあ……はあ」

オナニーを覚えたのはその時からだ。一貫してクリトリス派である。

検査で何が分ったのか、汐織本人には何も知らされなかった。学校の先生は、そういう特殊能力は極秘扱いのはずだと言っていたが、大いに不満だった。

おそらく、監視する必要のない能力という判定だったのだろうと、汐織は考えている。あれ以来、一度も研究機関が接触してくることがなかったのだから、きっとそうだ。

「あ……あ……イクっ！」

やがて、汐織の脚がピンと伸びて突っ張った。片手で忙しく乳房を揉みながら、ワレメの頭から深く指を潜らせて、ぎゅーっと『具』を引き寄せる。張ったクリトリスが立ち上がって、ピンク色の亀頭を覗かせた。更に指先でクリトリス包皮のワレメの頭に近い部分をきゅっと指先で圧迫してやる。

「あああっ！ あああっ！」

目くるめく快感に腰が突き上がった。

ああ、手がもう一本あれば同時に穴に指を入れることが出来るのに。

オナニーの余韻に浸っていると、スマホのメール着信音が鳴った。汐織はそのまま五分ほど横たわっていたが、のろのろと身を起こして机の上に手を伸ばした。

「こずえったらまた友達の方に泊まるのかしら。こんなイタズラメールよこして」  
『やられちゃう』。内容はそれだけだ。汐織はため息をついてスマホを放り出した。

### 三、接触

「秋川汐織さんですね」

翌日のバイト帰り。汐織は見知らぬ男に呼び止められた。

「私はこういう者です」

差し出された名刺には『能力再開発研究所代表 目黒脩』とある。すわ、中学生の時の例の組織かと身構えたが、今更接触してくるというのも変な話だ。だとすると、心当たりはない。

「あの、何か」

「実は私、あなたの超能力に大きな関心がありました」

「……」

汐織が息をのんだ。この男は自分のことをどこまで知っているのか。探るようなまなざしを向ける。

「何のことですか？」  
「とぼけなくてもいいですよ。あなたは『他人を身代わりにする』能力の持ち主だ」  
目黒と名乗った男がにやりと笑った。

「……」

「見せてもらいましたよ。通勤電車の中で見知らぬ女性を身代わりに痴漢に差し出す一部始終を。おっと、ごまかしても駄目です。私も超能力者の末席にあずかる身でしてね。」

私は超能力者を見つけ出す超能力者なのですよ」

汐織の視線が忙しくさまよう。厄介な相手に絡まれたものだ。

「たまに満員電車で揉まれてみるのも悪くないですねえ。あなたのような類い希なる超能力者を見出したのですから。くくく」

「そ、それで私に何のご用ですか」

汐織の声はうわずっていた。

「なに、簡単なことです。私共の研究所に登録して頂けないかと思ひまして」

「登録？」

「はい。私共はリクエストに応じて、超能力者を紹介する橋渡し役を担っておるので。必要な時にちょっと能力を使ってくれればいいのですよ。もちろん報酬はお支払いします」

何とうさんくさい話だろう。汐織は本能的な嫌悪感を覚えた。



「……お断りします。他人様のお役に立てる能力じゃありませんから」  
 「いやいや、大いに役立ちますとも。例えば復讐にもってこいじゃありませんか」  
 「どういう意味でしょうか」

「女性に復讐したい女性の依頼者が多いのですよ。こういう方たちが望む内容……言わなくてもお分かりですよねえ」

目黒が唇の片側をゆがめて笑った。

「……」

「こちらら商売ですから、アルバイトのチンピラに余計な情報を渡したくない。あなたと本物のターゲットを引き合わせ、チンピラにはあなたを襲えと命令する。あなたはちょっと能力を使って頂くだけでいい。彼らは本物のターゲットに襲いかかるでしょう。事後、夢から覚めたチンピラは何が起こったのか覚えていない。たったそれだけで、そこらのOLより余程いい金になるのですよ？」

「……お断りします」

こんな悪巧みに利用されるなんて冗談じゃない。何故、強姦の片棒を担がなければならぬのか。汐織は顔を紅潮させた。

「そうですか、残念ですなあ。見知らぬ女性を身代わりに痴漢させる行為と大差ないと思います。あなた、痴漢される女性を助けるわけでもなく、人を呼ぶわけでもなく、黙って観察していましたよねえ。心の中では楽しんでいたのではありませんか？」

「あ、あの時は身動きもとれない状態だったんですっ」

汐織は叫んだ。こんな男に下着の中に手を入れられているところを見られたかと思うと、腹立たしいことこの上もなかった。

「まあ、いいでしょう。しつこい男は嫌われますからね」

目黒は拍子抜けするくらいあっさりと言った。

「でもね、そのうち協力したくなると思いますよ。くくく」

何、その捨て台詞。飄々と去って行く背中を見つめながら、汐織は背筋がざわつくのを感じた。

マンションに戻ると、こずえがリビングでテレビを見ていた。近頃は夜遊びしているみたいだし何とかして一度説教したいところなのだが、汐織の姿を見ると逃げるように自室に引っ込んでしまった。

それにしても態度がおかしい気がする。この間変なメールを寄越して、翌日の昼過ぎに戻ってきたところをつかまえた時も、おどおどしていた。「覚えていない」の一点張りで、会話にならなかったのだ。

制服がしわくちゃで、ブラウスのボタンがひとつ取れていた……

この子、何かあったのかしら。女の勘がそう告げる。『やられちゃう』のメールは、ジョークでなかったのかもしれない。だったら首に縄をつけてでも病院に連れて行って、婦

人科の検査を受けさせなければ。でも、訊いたところでこずえが正直に白状するとは思えなかった。

「ついこの間まで子供だったのに」

汐織はため息をついた。自分の初体験が高校三年の秋だったことを思えば、別に不自然なことではないのだが、認めたくない気持ちが強かった。

「私は奈那のことがあって、急いで初体験を済ませちゃったから……」

仕返しされることを恐れて、大して好きでもない同級生にパーズンを献上した。奈那に強姦で処女を破られる瞬間を観察されることだけは、避けたかったこと。好きでもない男に興味本位で墮穴の中まで覗かれて気が狂いそうだったこと。

今思えば馬鹿なことをしたかもしれないけど、自分なりに考えた末の決断だった。

「もう口出ししない方がいいのかな」

こずえの方から相談して来ない限り、黙っていよう。そう思うのだが、気持ちは晴れなかった。

それからひと月ほどは何もなかった。それどころか奈那の嫌がらせメールがばたりと途絶え、気味悪いくらいだった。

「ようやく諦めてくれたのかしら。だといいんだけど」

そして秋の気配も深まったある日のバイト帰り。

白いセダンが汐織を追い越して止まった。数人の男が降りてわらわらと向かってくる。

「！」

周りを見回しても他に人影はない。と言うことは自分を狙った物騒な連中と言うことだ。汐織は弾かれたようにスカートの裾をひるがえして駆け出した。

「んひっ!?」

あっという間に追いつかれ、身体を抱え上げられてしまう。輪姦まわされる！ 汐織の瞳孔が緊張ですぼまった。

「だ、誰かっ！ むぐっ！」

悲鳴を上げようとした口を塞がれ、しっちゃんかめっちゃんかに手足を振り回して抵抗する。膝丈のプリーツスカートがみるみるうちに捲れ上がり、肉付きの良い脚が宙を蹴る様子が夜目にも鮮やかだ。

「ひいっ！」

本能的に、女性の姿を求めて視線をさまよわせる。もちろん自分の身代わりになってもらうためだが、あいにく人っ子一人見当たらない。

足下から引きずり込まれそうになり、汐織は夢中でドアにしがみついた。車内からも手が伸びてきて、脚を引っ張られた。太腿を撫で回されるおぞましい感触に、必死で脚を固くよじり合わせて抵抗する。

犯される！ 犯される！

じわりと小水が漏れた。下着の股の部分にしみが拡がって陰裂の形状が透ける。男の一人が汐織の手をドアから引っぺがした。捕獲された若い女体が、悲鳴を上げながら車内に消えていく。まるで蟻地獄に吸い込まれる獲物だ。ドアが乱暴に閉められた。

「嫌ーっ！」「放してえっ！」  
車の外に甲高い叫び声が響いていた。汐織が猛烈に暴れるので、車体がゆらゆら揺れる。

「あああああっ！」  
あちこちから手が伸びてきて着衣を耂られ、もうどこを防御すればいいのか分からない。唐突に目の前に乳房が片方出現した。自分の乳房なのに、他人のものでも見ているような感覚だ。いつ胸をはだけられたのかすら定かでなかった。

指先が伸びてきて、乳首を摘まれた。

「ああっ！ 嫌ッ！」

最初は右乳首だけだったが、ブラジャーに隠れていた左乳房もつかみ出されて並べられてしまった。そのまま両乳首を指の腹で転がされる。

「ヒィーッ！」

「いい悲鳴ね。どんな顔してるのか見たいわ」

女の声!? 汐織は声の主の姿を探して目をこらした。足下の方向、男の影になって見え

ないが、確かに女が一人いて乳房に手を伸ばしていた。

「スカート丸まくれ。マンコのお肉が片方はみ出しちゃって。お似合いのいい格好じゃない」

「くひっ！」

下着の上から穴の位置をぐいっと押された。同性だけあって正確だ。膣穴の浅い位置に下着と指がめり込む。ようやくスカートが捲れ上がってひどい格好になっていることに気づいたが、男に押さえられて腕が動かなかった。

「ふふん、怖い？ あんたはこれからマンコを丸出しにされて晒されるのよ。皺ひとつ見えなくなるまでおっ拡げて観察してやるんだから」

奈那だ。この声は間違いない。確かめようと頭を起すと、今度は下着の中に手を突っ込まれてしまった。膣穴から上に向かってニルリと陰裂をなぞられ、太腿を震わせて悲鳴を張り上げる。

「アヒィィィッ！ や、やめてえっ！」

「ねえ、場所代わって。こいつの悲鳴顔見てやるから」

そして現れた因縁の顔。

「どう？ 能力が使えなければ手も足も出ないでしょ。あははははっ」

「な、奈那ッ！」

「ふふっ、仕返しされて悔しい？ せいぜい犯されればいいわ。穴にチンポ突っ込まれ

るところをしっかり見届けてあげるからさ」

「嫌ッ！ 嫌ああッ！」

奈那の指先が陰裂に潜ったまま動き回る。

クリトリスを探されている！ 汐織は直感した。女性器を弄って嬲り者にする気でのだ。

「くううっ！」

力の限りに太腿を固くより合わせる汐織だが、どう頑張っても指の動きを止めることは出来ない。同性だけあって、指の動きも正確だ。ものの数秒で包皮を引っ張り上げられ、クリトリスを半剥けにされてしまった。

「見つけたと。ふうん、汐織ってお豆が大っきい子だったんだ」

「嫌ああッ！」

クリトリスをコリコリと転がされた汐織が絶叫した。

「あははっ、いい悲鳴。効いてる効いてる」

「やめてえっ！ 奈那ッ！ ああああッ！」

「太腿ピクピクさせちゃって。速攻輪姦させるつもりでいたけど、その前にあたしの指でアへらせてやるっかな」

「ヒィッ！ そ、そんな事させないッ！」

「ふん、能力を失ったあんたに何が出来るって言うのさ。簡単にクリトリス摘まれてヒ

ィヒィ叫んじゃって」

「嫌ああッ！」

「ほらほら。早くイキ顔晒しなさいよ。穴からお汁垂らしてさ。くくくっ」

「うううッ！」

奈那の指先にじわりじわりとクリトリスを揉み込まれる。

「リセッターを使われるとは思ってもしなかった？ あはは、いい気味」

尿道口がツンと熱くなった。心構えする間もなく、女の最も敏感な部分を弄くり回されたのだ。歯を食いしばって括約筋を引き締め、失禁するまいと耐える。

「何、汐織。クリトリス弄られて漏れそうなの？」

「たちまち奈那に見破られてしまった。」

「あううッ！」

「イカせる前に、オシッコ噴かせるのもいいかもね。その前にマンコ開いて『娘さん』を見せてもらわなくちゃ。クリ豆剥き上げてやらなくちゃ」

「やめてっ！」

どんなに力を込めてもがいても、奈那の指先にクリトリスを転がされる状況は変わらない。

このまま弄られ続けたら……。汐織の顔が焦りでゆがむ。

痴漢されてイカされた、例の女性のアへ顔が脳裏に浮かんだ。

このままだと自分もあなる。間違いなく。奈那にイカされる？ 奈那にだらしなくイッた顔を観察されるの？ ヨダレを垂らしたメス顔を見られて笑われるのだ。そして、朦朧としてるところを膣穴に肉棒をねじ込まれ犯されてしまう。

奈那に強姦される瞬間を見られるだっ!? それだけは嫌だ。

「嫌あああっ！」

悲鳴を張り上げて脚に力を込める。しかし、汐織のクリトリスは包皮をめくられた状態で、根元をがちりと摘まれてしまっていた。

「あああああっ！ ひいひいひいっ！」

「汐織選手、クリ豆を転がされて大ピンチ！」

膣穴に軽く指を入れられた。濡れ具合を確認されたに違いない。

「あはっ、あたしにマンコ穴に指入れられて悔しい？」

勝ち誇った奈那が顔を近づけてきた。

能力が使えないって、さっきから何を言ってるの。リセッターって何のこと？

いや、そんなことはどうでもいい。汐織は思いきり目に力を込め、奈那の瞳を覗き込んだ。

チャンスは今しかない。

「え……嘘……」

奈那が焦った表情を浮かべた。だがそれも一瞬の間。瞳が焦点を失い、頭がくらりと揺れる。同時に、汐織を押さえつけていた男たちの飢えた視線が、奈那に集中した。

「いたぞ！ こいつだ！」

「剥いちまえ！」

男たちの中で時間が逆戻りしたようだった。

「きゃあああっ！」

次の瞬間、引き倒された奈那の身体がかぶさってきた。ターゲットが汐織から奈那にすり替わったのだ。

「嫌あああっ！」

狭い車内に女二人が横たわるスペースはない。脚をこちらに向けて汐織の身体に重なった状態で、奈那がヒン剥きかけられる。目の前で奈那の生足が宙を蹴り、捲かれたスカートの中の生暖かい空気が、女の匂いと共に鼻腔に入り込む。

「あああああっ！」

視界の大部分が水色の下着に覆われた奈那の股間になっており、捲れたスカートの向こうで、男の手が忙しく動いていた。ブラジャーが見え隠れしているということは、乳房をただけられている最中らしい。

「どうしてあたしがっ！ 嫌ッ！ 嫌ッ！」

柔らかそうな白い丘がちらりと確認できた。やがてブラジャーが引き抜かれて宙を舞い、男の歓声上がる。奈那は抵抗空しく、乳房を露出させられてしまったようだ。

「やめてええええっ！」

一瞬だが、むんずと握られてひしゃげた乳房が見えた。半分膨らんだ乳首も。男が奈那の乳房を握りながら、指先で乳首を弾いているのだった。BカップからCカップくらいのやや小ぶりの乳房は、あの時見たものと同じだった。

「アヒィィッ！」

もがく奈那の尻に押され、汐織は乱れた着衣を直すこともままならない。向こう側の男たちからスカートの中が丸見えだろうが、何もされる様子なかった。奈那の脚を押さえている男と目が合っても、見えていないかのようなスルーぶりだ。

（助かった……）

汐織はほっと胸をなで下ろした。今回ばかりは罪悪感はない。何を勘違いしたのか知らないが、奈那の自業自得だ。

男の腕が伸びてきて、水色の下着をつかんだ。気付いた奈那が、乳房を揉まれながら太腿を強張らせる。

「嫌あああっ！」

汐織の目の前を、水色の布がすべってフレームアウトして行った。両腕をバンザイさせ

られた奈那は、抵抗できないまま下着を脱がされたようだ。

水色から肌色へ。眼前の景色が一変した。剥き出しにされた奈那の『女の証拠』が、太腿の動きに合わせてパクパク開いたり閉じたり。

（嫌だわ、奈那ったら……）

これじゃまるで『共食い』だ。そう思いつつも、汐織の視線は女性器から離れない。一段と濃密なメス臭が漂う。

女子高生時代に見た女性器と、基本形は変わっていないかと思った。違いと言えば、多少恥毛が濃くなったことと、陰裂が年相応に口を開いていること。でも、ぽってりとした二枚の小陰唇が合わさった、『女』の佇まいはそのままだった。

「ヒィッ！ ヒィッ！ ヒャアアアッ！」

マンコを露出させられた奈那が、パニックになって暴れる。汐織は奈那の膣穴がぬめっていることに気付いて、腹立たしい思いだった。

（私の下着の中に手を突っ込んで、いい気になっていたんだわ）

とっさの機会を捉えて能力を使わなければ、逃れることは叶わなかったことだろう。奈那の気が済むまで女性器を弄くられ、挙句に男たちに輪姦されたに違いない。

「ヒィィッ！」

奈那の下着を脱がせた男の顔がぬっと現れ、口を半開きにしてマンコに吸い付いた。大陰唇の扉を押し開き、鼻面がズブズブとワレメに潜っていく。男の鼻に押し上げられ、陰

裂の途中に肌色のパーツが露出した。クリトリスの鞘だ。汐織の位置から、三角フードの中に収まっているクリ豆がかすかに見えた。舌先が小陰唇の内側まで入り込み、膣穴を舐め回す。

奈那の内腿がブルッと震えた。男の喉から「んぐんぐ」と低い声が漏れてくる。

「早速味見してやがる」

乳房を捏ねていた男が一人、下半身側に移動してきた。

「美味いか？ 俺にも舐めさせろよ」

「んぐんぐ」

男の指先がワレメをかきあげた。小陰唇が引っ張られて輪の形になり、膣前庭の襞が露出する。赤みがかかった粘膜が唾液で濡れて光っていた。

「嫌あああっ！」

小陰唇内側の領域を、縦横無尽に這い回る舌先。奈那がどんなに脚をばたつかせたところで、逃れることは出来ない。腰の位置は動かないから、男は余裕の表情でマンコをレロレロに舐め続けるのだった。脚を閉じようと力を込める度に、膣穴と尿道口がヒクヒク動く様子が卑猥だ。

「アヒィィィッ！ ヒィィィィッ！」

もがく奈那の体温が伝わってくる。

「こっちゃんも吸ってやれよ」

男の指先がクリトリスフードの切れ目を引っ張り上げた。プリッと剥け上がる性感の塊。

（あの時と同じだわ）

あの時も奈那はマンコを舐められ、クリトリスを観察されていた。暴れる脚をこじ開けられ、クリトリスを剥かれる様子が思い出される。包皮の上に引っ張り上げれば早いものを、経験不足の少年たちが包皮の中に覗く肉芽を露出させようと苦労していた。最初に奈那のクリトリスを根元まで剥いたニキビ面の少年の得意そうな表情。

露出した奈那のクリトリスは、高校三年当時とサイズも形も変わっていなかった。やや丸みがかっており、小陰唇の接合部がくつきりしている。

「お？」

穴舐め男はピンク色の突起を確認するや、標的を変えてタコのように吸い付いた。

「アヒィィィィッ！ 嫌あああっ！」

汐織の身体の上で、奈那がビクンと反応して腰を突き上げた。逃れようと激しくローリングする女体を、男の腕が押さえつける。

「駄目えええっ！」

同性として、これは堪らないだろうと思った。一番敏感な女芯に無理矢理吸い付かれたら、自分だって絶叫する。だが汐織は別の心配をする必要に迫られていた。男の口が離れた奈那の膣穴が先ほどよりも湿っていたからである。男のヨダレではないことくらい、容

易に判別がつく。

（あれが垂れてきたら、私の顔にかかっちゃうじゃない）

それだけではなかった。このままクリトリスを吸われたら、奈那はイカされてしまうだろう。男が吸い続けるのを止めなかったら？ たぶん奈那は失禁してしまうはずだ。

（冗談じゃないわ）

汐織は、暴れる女体の下から脱出しようとして頑張った。奈那が腰を突き上げる瞬間が唯一のチャンスだ。座席の背もたれを利用して横向きに体勢を変える。

苦勞して奈那の尻の圧力から解放されたと思ったら、側頭部に衝撃があった。目から火花を散らせながら首を回すと、脚がブンブン暴れている。また蹴られてはたまらないので、汐織は太腿に腕を絡ませて抱え込んだ。男たちに協力する形になるが、致し方あるまい。奈那の脚の力は驚くほど強く、しっかりとしがみつかなければならなかった。

腹の上に乗っていた奈那の上半身が、すんとシートに落ちた。これで小水の直撃を受けることはないだろう。

「アヒィィッ！」

視点が変わり、奈那の身体をほぼ真横から見ることになった。

奈那はクリトリスを吸われながら、同時に乳首を両方とも舐められていた。左右の乳房にそれぞれ『担当者』がついて、好き勝手に乳首を吸ったり弄ったりしている。ヨダレま

みれの乳首がピーンと尖り、乳暈が盛り上がっていた。両腕をバンザイさせられているので、奈那に出来るのはひたすら悲鳴を上げるだけだ。

「おい、代われ」

マンコ吸い付き男の頭をひっぺがし、別の男が顔を埋めた。膣穴から始まって、陰裂の中身を下から上に向かって舐め回しながら、クリトリスに吸い付く。陰裂に潜った鼻先が動く、奈那のもやっとした恥毛も小刻みに動く。

「やめてええええっ！」

（これもあの時と同じ）

汐織の脳裏に、全く同じ体勢でクリトリスと両乳首を舐められる奈那の姿が浮かぶ。

「ヒィィッ！」

甲高い悲鳴もあの時のままだ。

「ぶはっ!？」

クリトリスに吸い付いていた男が慌てた。顔面が濡れている。どうやら軽く小水を引っかけられたらしい。早めに脱出してよかったと胸をなで下ろす汐織。

出来れば車内から逃げ出したかったが、首を回して見渡した感じでは無理そうだった。どのドアも男たちが邪魔で通れそうもない。

「処女か？」

「いや、貫通済みだな」



男たちが奈那のマンコを拡げて覗き込んだ。ぱっくりと開かれた、肉色の生々しい『女』が嫌でも目に入る。円く展開する小陰唇の輪。クリトリス包皮が斜めによれて剥けた肉豆。

「これが処女膜の名残だ」

男の一人が得意そうに膣穴付近の襞を摘まんだ。汐織もつい、目をこらしてその部分を確認してしまう。

「ヒィーッ！」

乳首をしゃぶられる奈那は、下半身の状況に気付く余裕はなく、相変わらず叫び続けた。

「よし、順番を決めようぜ。ジャンケンだ」

誰かが言うのと、男たちが一斉に盛り上がった。他人が射精した穴にチンポを突っ込むのは、出来れば避けたいのは当たり前だ。

汐織は軽蔑の思いを持って、一喜一憂する男たちを観察していた。逃れようとジタバタする奈那の身体が、シートの中央に引き戻される。

目の前に『ぬっ』と勃起したチンポが現れた。反射的に顔をそむける汐織。

「しっかり押さえてくれ」

一番槍を引いた男が肉棒を膣穴にあてがった。ようやく犯されると気づいた奈那が暴れたが、もう手遅れだ。男が腰を押し出すと、肉棒がズブズブ潜っていく。

(……)

奈那が強姦される瞬間を見た汐織は、複雑な思いだった。憎い仇を犯させるつもりが、自分がやられている。しかもこうして犯されるところまで見られてしまって、馬鹿な女。いつまでも過去を引きずっているから、こんな目に遭うのだ。

自分に処女輪姦される姿を見られた悔しさにあれこれ画策した挙句、また同じ目に遭っている。膣穴にずっぼりと埋まった男根。あの時と同じ。

「イヤァァァッ！」

「うるせえ、ほらしゃぶれ」

悲鳴を上げる口にも、チンポがねじ込まれる。

「もがっ！」

「噛んだらぶっ殺すからな」

ずん、ずん、と突きまくられる奈那の乳房が揺れていた。犯される奈那の両脚が、ひっくり返された亀みたくにもがく。多少は濡れていたから、苦痛はないだろう。汐織は黙って抜き差しを繰り返す結合部を見つめていた。

「うほっ……出るぞ」

ほどなく一人目が果てた。待ち構えていた二人目が、慌ただしく膣穴にチンポを突っ込む。

「嫌あああっ！ 汐織ッ、また見ているんでしょッ！」

犯されながら奈那が叫んだ。  
見ているも何も、目の前数センチの特等席だ。抜き差しされるチンポに絡む小陰唇の動きから、結合部からにじむ白濁した液体まで丸見え。

「あひいいいっ！ あひいいいっ！」

手空きの男が陰裂の上部を押し広げ、包皮をめくり上げてクリトリスを摘まんだ。奈那の太腿が不規則に痙攣する。

「悔しいいいいっ！」

奈那がピュッと短く失禁した。

(見ている場合じゃないわ…)

汐織は、脱出しようとした。このまま最後まで観察していたら、奈那の恨み言をこつてり聞かされる羽目になるのは間違いない。自業自得と嗤ってやってもいいが、逆上させるのは得策ではない。

男たちが下半身側に移動したので、向こうのドアが手薄だった。

犯される奈那とシートに挟まれながら、少しずつ身体をずらしてドアに近づく。

三人目の男が果てて四人目に代わる時、奈那は俯せて尻を上げた体勢にされた。バックからぶち込むつもりなのだろう。

汐織はその隙にドアを開けて這い出ることに成功した。

(……)

窓越しに車内に目をやると、輪姦される奈那の全身が見えた。後ろから肉棒を突っ込まれ、叫びながら小水を漏らしている。

「……馬鹿な女」

汐織は身をひるがえして、小走りに現場を後にした。

「今、お帰りですか」

もう少しでマンションというところで、汐織は男に呼び止められた。ぎょっとして立ち止まる。

「お忘れですか。能力再開研究所の目黒です」

忘れるはずがない。先日の薄気味悪い男だ。汐織の超能力を利用したがっている悪者。

「お断りしたはずですが」

「そう毛嫌いしないで下さいよ。首尾良く災難を逃れたようで、なによりです」

詩織は顔を強張らせた。

何故、この男は知っている？ どこかで見ていたと言うのか。

「私は超能力者をサーチする能力の持ち主、と自己紹介したではありませんか。残念ながら、あなたほど能力にキレがないので、場所まで特定するのは骨が折れましたがね」

目黒は唇の片側を吊り上げて笑った。  
「と、とにかく！ 私は関わる気はありませんから  
ますます気味が悪い。汐織は後ずさった。」

「危機一髪でしたねぇ。思ったより立派な乳房をお持ちだ。着やせするタイプですか  
な」  
襲われた現場を見られていた!? 汐織は立ちすくんだ。

「私は車の外に立っていたのですが。あれでは気付く余裕はなかったかもしれない  
な」

「いい、いい加減なことを言わないで下さいっ」

「下着の中に手が入っていましたよね。女性にとって、クリトリス狙い撃ちは恐怖です  
よねえ。ふふふ」

汐織はよろめいた。何かにつかまらないと卒倒してしまいそうだった。

間違ひなく見られている。奈那に身体をまさぐられ、着衣が乱れた恥ずかしい姿を。

「ご心配なく。ああいう光景は見慣れていきますので。復讐請負なんて仕事をしておりま  
すと、襲われる女性の姿を見るのは仕事の一部なのですよ」

「……」

「もう一人の女性。奈那さんでしたか。お気の毒でしたねぇ」

目黒は汐織の混乱に乗じて奈那の名前まで出した。

「だ、誰のことですか」

汐織は口ごもった。どうして奈那のことまで。

「あなたが超能力を使って身代わりにした女性ですよ。ミイラ取りがミイラになると  
は、ああいうことを言うのでしょうか」

「……」

「私は諦めの悪い性質でして。何とか考え直していただけないかと願っているのです。

あなたの能力は素晴らしい」

目黒がたたみかけた。汐織の目が泳ぐ。

この男と奈那の接点はないはず。にもかかわらず名前まで知っている理由は……

「あの子に依頼されたんですか」

思いつく答えはひとつしかなかった。

「ご明察。雑誌かネットでうちの広告を見たのでしょう。あなたの名前が出た時は、さ  
すがに驚きました。でもお断りしましたよ。私はあなたに協力してもらいたいのですか  
ら」

「では何故……」

「襲われた理由ですか。さあ、分りませんな」

目黒は肩をすくめた。

「あなたに返り討ちにされるリスクに気付けないほど、頭が弱い人には見えませんでし

たがねえ」

そう言えば、奈那は超能力を使った時ひどく驚いていた。

「あの子、私が能力を失ったと思い込んでいたみたいだけど……」

「……ほほう、そういうことですか。やっと合点がいききました」

目黒は思い当たる節があるようだが、汐織には訳が分らないままだった。

「どういうことですか？」

「偽リセッターに引っかけたのでしょう。彼女、色々調べている様子でしたから」  
汐織は口を尖らせた。聞いたことのない単語だが、この男に説明してもらおうのも癪に障る。

「ご存じない？ 超能力の一種ですよ。極めて稀な能力ゆえに、偽者も多い」

「……」

「まあ、あなたがリセッターの世話になることは、あり得ないでしょうな」

目黒がニヤニヤしていた。馬鹿にされているようで腹立たしかった。

リセッターなるものについて、後で調べてみなくては。

「奈那さんのことは置いておきましょう。で、話を戻しますが。考え直していただけませんかねえ」

「だ、だからどうして私が、強姦の手伝いをしなければならいんですかっ！」  
憤りで鼻の穴が拡がる汐織。

「ふふふ、偽善はよしまししょうよ。あなただって、楽しんで観察していたのでしょうか？」

痴漢しかり、奈那さんしかり」

「そっ、そんなことはっ……」

即座に否定できないところが悔しかった。

「女性には多かれ少なかれ、強姦願望があるそうです。自分の身に置き換えて、夜の『おかず』にしているのではありませんか」

「馬鹿なことを言わないで下さいッ！」

凶星だけに、絶対に認めるわけに行かなかった。強い言葉と裏腹に、視線がさまよっている。

「うちは依頼を引き受ける際、裏付けを取ります。仕返しされて当然のことをしでかした女性がターゲットなのです。通りすがりの女性を襲えと言ってるわけじゃない」

「でもっ」

駄目だ、この目黒という男の方が一枚上手だ。このまま話を続けていたら、丸め込まれてしまう。

「と、とにかく……もう近づかないで下さいッ！」

汐織は後ずさりして駆け出した。

襲われた際に乱れた着衣をちゃんと直していなかったせいで、途中で乳房がブラから飛び出てしまったが、立ち止まるのが怖くて全力で走った。

マンションの手前まで逃げて、おそるおそる振り返る。目黒は追いかけるつもりはなかったらしく、姿が見えなかった。良かった。汐織は足早にオートロックの内側に逃げ込んで息を整えた。

#### 四. 調査

——リセッターとは。

目黒は、超能力の一種だと言っていた。

「もう……：どれが本当でどれが嘘だか」

汐織がモニターとにらめっこしていた。

ただでさえ超能力について正しく書かれた情報は少ないのに、リセッターについて調べ上げるのは容易ではない。それでも、『超能力を消去する能力を有するもの』をリセッターと呼ぶらしいと分った。

「奈那は私を無力化しようとした……」

汐織は愕然とした。

偽者に引っかけられてくれたおかげで事なきを得たものの、そうでなければ……奈那を『身代わり』にした瞬間のことを思い浮かべてみる。

——イカせる前に、オシッコ噴かせるのもいいかもね。その前にマンコ開いて『娘さん』を見せてもらわなくちゃ——

能力が使えなければ、私はただの小娘だ。数人の男と奈那に捕まって逃げ出せる可能性はゼロだろう。

あのまま、奈那の言葉通りの目に遭わされていたはず。奈那の目の前で。

「調べてみて良かったわ。だけど、どうしたらいいんだろう……」

奈那があれで諦めるはずがない。いずれは本物のリセッターを見つけてしまうだろう。

その事がもたらす結末を考えると、背筋が寒くなった。奈那に犯される様子を観察されるなんて、絶対に嫌だ。

「まずは、リセッターのことを正しく知らなくては」

どのようにして超能力を消去するのか。能力がなくなるのか、弱められるのか。本人がその場にいらなくてもリセット可能なのか。

近くにリセッターはいないだろうか。深夜まで調査を続けた汐織だが、収穫はアルバイト先の近くの、『相談無料』という一件だけだった。

「自称リセッターばかりで、誰が本物だか分からないじゃない！」

しかも料金は馬鹿高い。余裕で給料ひと月分が吹っ飛んでしまう。奈那は本当にこんな高い金額を払ったのだろうか。恐るべき執念だ。

迷った末、汐織は『相談無料』に連絡してみた。身元を特定されないよう、駅の公衆電話を利用したことは言うまでもない。

電話に出たのはボソボソした男の声だった。それが相手が若い女だと分ると途端に愛想が良くなり、「すぐに迎えに行かせますから」と猫撫で声を出すのだった。怪しい。実に怪しい。

汐織は言われた場所から少し離れて、どんな人が現れるのか窺ってみることにした。変な奴だったら、そのまま帰ってしまえばいい。

果たしてやって来たのは三十前くらいの女性だった。むさ苦しい男を想定していたので、意表を突かれた形だ。

同性だからと言って安心は禁物だが、汐織は話を聞いてみることにした。

そして案内されたのは、看板も何もない、ありふれたワンルームマンションの一室。部屋の真ん中に不似合いなほど大きなソファとローテーブルが置いてあり、電話に出たと思われる男が座っていた。

「ええと、チャットレディの件でしたっけ」

「はい？」

「じゃなかった…：あつ、リセッターね、リセッター。大丈夫ですよ」

何が大丈夫なものか。このやりとりだけでニセモノ確定だ。

すぐに立ち上がって帰ろうとしたが、出迎えの女性が横に座ってしつこくジュースを勧

めてくる。こんなものに口をつけたら、何をされるか分ったものじゃない。汐織は腹具合が悪いことにして、頑なに拒み続けた。

「ところで、芸能界デビューするつもりはありませんか？」

喋り続ける男の話を聞き流していると、すぐに『本題』に入ってきた。

「…」

「最初は軽く肌を露出するお仕事から始めるんですけどね。あなたなら、すぐに有名プロダクションから声がかかると思いますよ」

やっぱり、こういうことなのだ。汐織は連絡したことを後悔した。

「私、帰りますから」

「まあまあ、プロモ写真だけでも撮っておきましょうよ。今月はなんと、無料登録サービス中なんです」

「いえ、結構です。帰りますから」

「綺麗に撮ってあげるから。ね？」

出迎えの女性もグルになって、汐織の服を脱がそうと手を出してくる。

「や、やめて下さいっ」

カメラを構えた男の前で、女性に絡みつかれるように倒されてしまった。たちまち足元からスカートの中にフラッシュを浴びせられる。

「と…：撮らないでっ」

「いいからいいから。はい、オッパイ出しましょうね」  
「あああっ！」

一瞬でカットソーをたくし上げられ、ブラジャーを引っ張られてしまった。プルン、と揺れながら露出する乳房にもフラッシュが炊かれる。

「はいはい、暴れない暴れない。あなた、乳首綺麗ねえ」

飛び出した乳房の揺れが収まらないうちに、乳首を摘ままれてしまった。

「嫌っ」

「身体の隅々まで撮ってあげるからね。さ、次は『娘さん』を見せていただこうかな」  
やたらに力の強い女だった。柔道かレスリングの経験者だろうか。後ろ手にひねられた腕が、全く動かない。

「やめてえっ！」

下着の中に手を入れられた。指先が陰裂の上端からズブズブ潜ってくる。

嫌らしい指先に肉芽の位置を探られ、包皮をめくられそう。汐織の脚がビクンと痙攣した。女が「きゃはは」と笑う。

「ひいっ！」

「ここ、弱いのか？ 女の子だもんねえ」

必死で頭を上げて下半身を確認すると、下着の股当てをずらされてしまっていた。男がまっすぐにレンズを向けている様子も見えた。

「あああっ！ 撮らないでっ！」  
ツン、と陰裂の中で衝撃。包皮をめくられたクリトリスに、容赦なくフラッシュが炊かれる。

「やめてええっ！」

「可愛い悲鳴上げちゃって」

無遠慮に剥きクリを摘ままれ、汐織は太腿を突っ張らせた。

「ほらほら、しっかり抵抗しなくちゃ。クリトリスを撮られちゃってるわよ」

ワレメの内側がスースーと涼しかった。

女がマンコを広げて中身を撮影させているのだ。

「ヒィィッ！」

「トロトロにしてあげよっか？ 気持ちいいこと大好きでしょ」

「嫌あっ！」

もがく脚がローテーブルを蹴飛ばしたらしく、積んであった書類が床に散らばった。このままでは犯される。

汐織は意を決して、組み付いている女の目を覗き込んだ。

—— くらり。女の目の焦点が外れ、頭が揺れた。

「……」

危なく強姦されるところだった。足元で組んずほぐれつし始めた男女を見下ろし、胸をなで下ろす。

「自分がトロトロにされちゃえばいいんだわ」  
床に散らばった書類に目をやると、写真の束だった。

あられもない姿にされた女性、女性、女性。悲鳴を上げている顔もあれば、眠らされている子もいる。大きい乳房、控えめな乳房、びっしりと毛の生えたマンコ、無毛のマンコ。中には制服姿の女子中学生まで。

本人の同意なく広げられた女性器のオンパレードだ。膣口を剥かれ、クリトリス包皮もめくられ、これでもかと『ナマモノ』を晒された女性たちの記録がそこにあった。汐織と違って、この女性たちには逃れる術がなかったのだ。

「超能力がなければ、私もあのまま……」

彼女たちの『惨状』は、自分が晒したであろう姿でもある。

「……」

汐織は男のカメラからフラッシュメモリーを抜き取った。風船のような乳房を捏ねられてヒィヒィ叫ぶ女をまたぎ、脱出する。

マンションに戻って試しに検索してみると、出るわ出るわ。先日はリセッターというキーワードで調べたから気付かなかったが、数十種の甘言で女性を釣ろうとしているのではな

いか。モデル、秘書、芸能人の付き人等々。

ああやって女性の恥づかしい姿を撮影しておいて、脅したりすかしたりしながら、怪しげな仕事場に送り込んでいるのだろう。

何故誘い文句にリセッターが入っていたのか謎だが、あの様子ではリセッターが何であるのか分かっていない。

「タダほど高いものはないってことね」

汐織はため息をついた。

今のバイトはあの『相談無料』に近いから辞めた方がいいかも。顔を見られているし、絶対に変に思っているはず。我に返った時は同士討ちしているんだから。時給の割にいい仕事だったのだが……

「もういい。お風呂に入って寝よう」

こずえの部屋の前を通りかかると、声が漏れていた。誰かとスマホで話しているようだ。

（わけ分かんないよ。あの後しばらく、穴がヒリヒリして大変だったんだからさ）

汐織は眉をひそめて立ち止まった。

（ううん、見たこともない人たち。だって、襲われたんじゃ、防ぎようもないじゃん）  
この子、強姦されたの!?

汐織は、数日前にこずえの態度が不自然だった事を思い出した。『やられちゃう』のメ



ールも。きっとあの時だ。

（だから、数人がかりでやられたんだって。女もいたけど見た事のない人。……そう、いきなり車で拉致られてどっかの部屋に連れ込まれて。……無理だって、逃げるなんて）

「……私がオナニーしていた時間に、こずえは襲われていた」

（ビデオ撮られちゃったんだよね。ばら撒かれたらヤバイよ。うん、顔もバッチリ映ったはず）

罪悪感で胸がチクチクした。心の中で、「あれだけじゃ助けようがなかった」と言い訳する。

汐織は複雑な面持ちで部屋の前を離れた。

その後もあれこれ調べてみたが、本物だと確証が持てる情報は見つからなかった。

あまりのんびりしてはられない。こうしている間にも、奈那は本物のリセッターを探して動いているはずだ。

「この人しかないか……」

机の上に置いた名刺の前に、汐織はうなった。

この目黒という男が現れてから、ろくな事がない。立て続けに危ない目に遭っている。女に災難を呼び寄せる能力も兼ね備えているんじゃないか。

でも、目黒なら『本物の』リセッターについて知っている気がした。

好きこのんで関わりたくはないが、他に伝手はない。遅れば遅れるほど、事態は悪くなる。

身を守るためだ。汐織は意を決してスマホを取り出した。

「おやおや。折角の能力を捨ててしまうおつもりで？」

リセッターの話を持ち出すと、目黒は低い声でつぶやいた。明らかに警戒している。

「まさか。どんなものか興味を引かれただけです」

「……そうですか。でしょうな。前にも言った通り、ネットで見つかるのは偽者ですか  
らご注意を」

「本物ってどの位いるんですか」

「さて……どうでしょう。私の知る限りでは、活動している事務所はひとつだけですが」

「あの……紹介してもらえませんか」

「どうするおつもりで？」

目黒の声は固かった。

「だから、興味があるんです。能力が消滅するのか、弱まるのか、副作用があるのか。本人が目の前にいなくても効果があるのか」

「私も面識があるわけじゃないのですよ。商売柄、存在を知っただけでして」  
目黒は汐織の言う動機に納得していない様子だった。

「やれやれ、私としたことが。リセッターのことなんぞ、口にすべきじゃありませんでしたな」

受話器の向こうからタバコに火をつける音が聞こえる。苛立っているようだ。

「この間……私が車の中で襲われた時にいた一緒にいた女性、覚えてますか」

汐織は、もう本当の理由を言ってしまった方が良さそうだと思いい直した。目黒の利害とも一致する。

「ええ。奈那さんでしたか」

「そうです。彼女は私を恨んでいるから、絶対に引き下がらないはず。いずれは本物のリセッターを見つけ出して、借金してでも私の能力を消しかかるでしょう」

「おおよその事情は、依頼を受けた際に聞きましたが。それは恐怖ですなあ」

「……」

「つまり、奈那さんより先にリセッターを見つけて、先手を打っておきたいと」

「ええ……」

「ふうむ」

目黒はしばらく考えている様子だった。

「……では、こういう条件でいかがでしょう。あなたには一度、こちらに協力していた

だ。その後で情報をお渡ししましょう」

汐織が自分の身を守ってくれる能力をみすみす捨てるはずはない。そう判断したようだ。

「そんなんっ！」

汐織は絶句した。

「ギブアンドテイクですよ。世の中、そういうものでしょう？」

「……」

ここで突っぱねたらどうなるか。遠からず、恐れている事態が襲いかかってくるだろう。それも高確率で。喉元にナイフを突きつけられているようなものだ。

汐織は、目黒の提案を飲まざるを得ない立場にあることを思い知らされた。

「いかがでしょう。報酬もちゃんとお支払いしますよ」

「……本当に、一度きりでしょうね」

「もちろんですよ」

目黒の含み笑いが癪に障った。でも背に腹はかえられない……

汐織はうなされて目が覚める事が多くなった。

夢にあの輪姦されていた女性の姿が出てくる。私が犯させた女性の姿が。

「自分がした事をされるだけです。気に病むことはありません」  
 目黒は三角関係のもつれだと言っていた。恋敵の女性を襲わせた復讐の依頼らしい。でも、それが自分と何の関係がある。私は検察官でも裁判官でもないのだ。薄暗いバーのソファの上で猛烈に抵抗する女体。着衣を引き耨られ、望まずに剥き出しにされる女性器——他人の女性器を間近に見るのは、奈那に次いで二人目だ。バーのママさんがドアに鍵をかけていた。ということは、店の人たちもグルだったのだ。

そして女性が襲われ始めると同時に、カウンター席から移動してきた依頼者らしき女性。全くの無表情で凄惨な暴行現場を見つめていた。何を思っているのか窺い知れず不気味だった。その依頼者に向けて男たちが女性の股をこじ開けて女性器を晒し、これでもかと掻き上げる。

クリトリス包皮があつという間に引き攣れて口を開け、半球状のクリトリス亀頭が剥け上がった。

その女性にはヒィヒィ叫ぶ他に出来ることがなかった。胸元が広く開いたワンピースが女性の抵抗でずり下がって、ブラの内側から乳房が波打ちながら軟体動物みたいにはみ出す。柔乳気味のポリウムたっぶりの膨らみが、誰にはだけられたわけでもないのに、勝手に丸出しになって揺れまくっていた。

乾いた膣穴に男がローションを擦り込み、男根を突き刺す。二人がかりで押さえつけられ、突きまくられる女性の乳房が踊っていた。  
 汐織は女性の隣に座っていたので、角度的に膣穴に男根が刺さっている様子が良く見えた。依頼者の女性が確かに恋敵が強姦されたことを確認して、唇を歪めて笑っていたのが印象的だった。

犯し犯されの愛憎劇なのだろう。かつて立場を逆にして同じ光景が繰り広げられたはず。  
 繰り返して言うけど、それが自分と何の関わりがあるだろう。  
 たとえ断ったところで、あの女性は運命に逆らえなかったと思う。目黒は別の手段を用いて目的を果たしたに違いない。でも今回の災難は、自分が能力を使った結果であることは事実……

その女性は五人に輪姦され、三人目でイッた。  
 乾いた膣穴に淫汁が滲み、ついにはあふれ出て尻穴まで垂れる様子。  
 悲鳴が喘ぎ声に変わり、乳首をほ乳瓶みたいに立てて乳汁を噴く様子。  
 依頼者の女性は、イッて腰が抜けた女性のクリトリス器官を陰裂の中から引っ張り出し、容赦なく揉みしごいてとどめを刺した。暴行劇は女性が失禁して白目を剥いて気を失うまで終わらなかった。

大量の淫汁にまみれた膣穴。荒い呼吸と共に一定周期でゆらゆら動く、乳汁で艶光りする乳房。

生々しい事後の姿が、汐織の臉の裏に鮮明に映し出される。

汐織は額に浮かぶ汗を拭いた——まったく因果な能力だ。

「いっそ、本当にリセットしてもらおうかしら。でも……」

そして、考えはいつもの堂々巡りにはまっていくのだった。能力を失った結果を思うと、どうしても踏み込めない。

「とにかく、リセッターの話だけでも聞いておこう」

汐織は無理にでも眠ろうと目を閉じた。

そして浅いまどろみの中で、いつの間にか犯される女性と自分が入れ替わる幻覚を見る。

どんなに目に力を込めても能力が発動せず、絶望と屈辱で何も考えられない。輪姦される私を、名前も知らぬ女性がじっと眺めている。男根を根元まで啜え込まされた膣穴に、何度も何度もフラッシュを浴びせられる私……

その夢を見た時は、朝が来るとシーツに染みるほど濡れているのだった。勃起した肉芽がドクンドクンと脈打って、中々おさまらない。まるで夜通し見えない誰かに悪戯されていたかのような。

目黒に教えてもらった『本物』のリセッターは、地方都市在住だった。住所しか分らず、ネットの検索にも引っ掛からないので、イチかバチか訪ねてみるよりなかった。一日がかりの小旅行だ。

果たして迎えてくれたのは、二十代半ばの双子姉妹だった。色素の薄い瞳が印象的な、大変な美人だ。一見して世間離れした『何か』を感じさせる雰囲気を漂わせていた。

双子姉妹は、快く汐織を招き入れてくれた。あちらも一目で、汐織が超能力者であることを見抜いたようだ。

「コントロール系の能力でしょうか？ 強いエネルギーを感じます」

汐織は自分の能力について正直に話した。この姉妹は間違いなく本物に違いない。

「勿体ないですよ。ご自分の身を守るために必要でしょうに」

「迷っているところなんです。今日は、お話を伺えないかと思ひまして」

「ああ、そういうことですか。何なりと」

汐織は一番知りたかったことを尋ねた。つまり、本人がその場にいらなくても強制的にリセット可能なのか。

「それは無理です。リセットとは、身体から超能力エネルギーを抜いて、空っぽにしてしまうことですから」

双子姉妹は、同じ仕草で上品に笑った。

汐織がほっと胸をなで下ろす。これで奈那に抜け駆けされる心配はなくなった。

「どのようにしてリセットするのか、説明いたしましょうか。それなりに覚悟が必要になる話ですから」

「覚悟……ですか？」

「はい。女性の場合は性器から力を抜き取りますので、裸になっていただくことが大前提になります」

うわぁ、と引く汐織。

「それも、自我がなくなった状態に持っていかないと、抜き取りは上手くいきません」

「……とおっしゃいますと？」

「平たく言えば『イッていただく』ということですね。こちらはその間に処置を行います」

「……」

汐織は言葉が出なかった。

「私、由里が抜き取りを行い、妹の絵里が抜いたエネルギーを受け取って蒸散させます。能力の強さによりますが、所要時間はおよそ三十分程度でしょうか」

「あの……」

「残念ながら、他の方法はありません。リセットを諦めるか、覚悟を決めていただくか、どちらかです」

汐織はため息をついた。そんな恥ずかしい目に遭うならリセットなんかするまい。心の

中でつぶやく。

「超能力エネルギーは通常十七、八歳の時がピークで、徐々に弱まっていきます。何もしなくても四十歳くらいまでには消滅するので、放っておくのも手ですよ」

姉の由里が、汐織の心中を見透かしたように笑った。

「今日は丁度、予約が入っているから、見学していただくのはどうかしら」

妹の絵里の提案に、「ああ、実際に見ていただくのが分りやすいわね」と由里が同意した。

「いかがでしょう。お時間は大丈夫ですか」

由里が顔を向けて、「生々しい現場に立ち会う覚悟は必要ですが」と付け加えた。

「……折角ですからお願いします」

汐織は少し迷ってから答えた。

ともかく見てから考えよう。それに、リセットの現場を見る機会なんて一生で今だけだろうと思うと、好奇心もわいてきた。

「ちなみに、どんな能力を持つ方なのですか」

「それは、プライバシーがあるのでお答えできませんが……高校二年生の女の子ですよ」

双子姉妹の話は興味深いものばかりだった。汐織は自分がどれだけ超能力について無知だったのか、思い知らされた。

夢中になってあれこれ質問攻めに行っているうちに、大分時間が経過したようだ。インターホンが鳴って初めて、汐織は出されたコーヒーに口をつけた。

「こちらへ。彼女の意識がなくなる頃を見計らって、呼びに参りますから」

汐織は別室に通された。本人の同意がないのでこっそり、という事だろう。意識がなくなる頃って……察した汐織が顔を赤らめた。

玄関先で制服姿の女子高生とすれ違う。今時珍しい、三つ編みの真面目そうな子だった。スカート丈もしっかりと膝下までである。

「……」

五分もすると女子高生の悲鳴に似た声が聞こえてきた。

普通の民家だから、防音が効いているわけではない。

「やめてくださいっ」

「そこ駄目っ」

「恥ずかしいですっ」

何をされているのだろう。汐織は聞き耳を立てた。

「ああっ、嫌ッ 駄目え」

「あふっ、ひっ、変になっちゃう」

双子姉妹二人がかりで攻められているのだろう。『ツボ』を心得た同性の手にかかるのは、耐えようがなくて恐怖ですらある。

「ひいっ……駄目……はあああっ」

うろたえた声が、時と共に『メス』の声に変化していく。

「あ……あ……はあ……っ」

やがて、長く尾を引く嬌声。汐織は思わず太腿をこすり合わせた。

「くひい……あああ……いいいっ」

「あんな真面目そうな子も、変にされちゃうのね……」

それはそうだろうと思う。自分だって、中学生の頃にはオナニーを覚えていたではないか。

音も立てずにドアが開いた。妹の絵里が顔を出し、にんまり笑って手招きする。

「どうぞ」

リビングに戻った汐織は、赤面して立ち止まった。

先程まで自分が座っていたソファの上には、肢体をさらけ出して悶え狂う女子高生。あの三つ編みの少女が大股広げて腰を突き上げ、もっと弄ってとばかりに申し訳程度に恥毛の生えたマンコを差し出しているのだった。

通常はぴったりと口を閉じているであろう陰裂は花開き、中身の『女一式』が見えている。まだ芯が残っていきそうな小陰唇が貝みたいに蠢いていた。陰裂の下端から肛門にかけて、白っぽい液体がとろりと垂れている。

シワにならないように丁寧に折って臍の上まで捲られたスカート。同じくホックを外されて首の下に引っかけられたブラジャー。女性として隠すべき部分は全て丸出した。

「うふふ、気持ちいいねえ。もっとくすぐってほしいでしょ」

姉の由里が、桜色の乳首を指先で弾いてからかっていた。

Dカップはありそうな、立派な乳房だった。若い乳房は密度十分で、仰向けになっても脇に垂れない。

「あああゝゝゝっ はあああゝゝゝっ」

「どうして欲しいの。またクリトリスを弄ってあげよっか？」

「はあああゝゝゝっ クリトリスうううっ」

「可愛いわねえ」

身体をくねらせて悶える少女。

「ささ、もっと近くへ」

絵里に背中を押され、汐織は長ソファの端っこに腰掛けた。

「すごいでしょ。でも、このくらいしないと処置に入れないんです」

「……」

汐織は茫然と少女の股間を見つめるばかりだった。

女子高生の顔には、廊下ですれ違った時の面影はない。ロンパリになった目の焦点はどこにも合っておらず、ヨダレが垂れた口を池の鯉みたいにパクパクさせている。

由里が女子高生の陰裂をパッキリと押し広げた。小ぶりな小陰唇が左右に分かれて膣前庭が露出する。女子高生の小陰唇の輪の内側は、肉色が判別できないほど、大量のお汁にまみれていた。

ワレメの真ん中で、まるまると太ったクリトリスが起立していた。集中的に弄られてしまったことは明らかで、完全に勃起して表皮がはち切れそうだ。クリトリス龟头が、不規則にヒクリヒクリと動いている。

絵里がビニールシートを床に広げた。

「では、始めましょう」

由里は唇をすぼめ、陰裂の内側に鼻を突っ込み、チュウと膣穴に吸い付いた。

「くひっ！ あああゝゝゝっ」

女子高生が身をよじる。絵里はその後ろにぴたりとくっついて、女性器を注視していた。

「やっぱりこの子はこっちかしら」

由里は頭を引くと、丁寧にクリトリス包皮を剥いて押さえ、舌先で舐め上げにかかった。

女子高生の反応は半端でなかった。身体を反り返らせ、言葉にならぬ叫び声を上げる。太腿をブルブル痙攣させながら、小水を迸らせる女子高生。しかし由里は動じない。尿道口を指先で塞いで直撃を避けながら、チュウチュウと音を立ててクリトリスを吸い上げる。

汐織は、先程絵里がビニールシートを敷いた理由を理解した。

こんな事をされて平気な女性はいないだろう。見ているこっちの気が変になりそうだ。女子高生の恥毛はまだ恥部の下の方まで進出しておらず、視界を遮るものはなかった。だから、小水に洗われて膣穴が剥き出しになった時、処女膜がはっきりと見えた。

「抜けてきました」

絵里が女性器の上に手をかざし、掬い取るような動きを繰り返した。

「これが超能力エネルギーです。見えます？ 無理かな？」

絵里に言われて目を凝らしたが、それらしいものは見えなかった。

「煙みたいに膣口から出て、こっちの方向に立ち上っているんですが。バルトリン氏腺からも少量出ています」

絵里は指先で膣口から斜め上に向かって線を描いた。でも汐織の目には、もや一つ見えない。残念ながらリセッターの素質はないようだ。

「ごめんなさい、私には見えません」

「いえ、見えないのが普通ですよ。あなたはエネルギーが強いので、ひょっとしたらと

思ったのです」

イカされっぱなしの女子高生はどうとう声も出なくなっって白目を剥いてしまったが、由里は容赦しない。女性器に顔を埋めて、執拗にクリトリスを吸い上げる様子は、まるで共食いだっ。理性を飛ばされた女子高生は、ムッチリと白い太腿を突っ張らせ、仰け反ったまま痙攣している。

汐織の脳裏に、身代わりに痴漢されてしまった女性の姿が浮かんだ。意識をなくし、ぬらぬらに濡れた女性器を晒す有様なんかそっくりだ。どうして女性は、こんなになるまでイキ続ける事が出来るのだろうか。

仮にリセットを決意したら、自分もこうなる。それを思うと、複雑な気持ちだった。

やだ、私も濡れている……。汐織はスカートに染みてしまわないか、気になった。

「そろそろ下火になってきました」

絵里が言った。

「これで、この子の能力はなくなるのですか」

「はい。じわじわ再生しますが、能力として使えるレベルに達するには、十年近くかかるでしょう」

「再生するのですか……。それと聞きづらいのですが……。料金はいかほどでしょう」  
それも気になる重要な要素だった。



「報酬はいただいております」  
 ようやくクリトリスから口を離れた由里が答えた。口の周りがお汁でベトベトだ。  
 「えっ、そうなんですか。だって、ネットで調べると……」  
 汐織は驚いた。

「あれは、リセッターではありません。強いて言えば素人の『お祓い』のような位置づけでしょうか」

絵里が笑った。濡れタオルで、女子高生の身体を丁寧に拭いてやっている。勃起したクリトリスが、陰裂を押しつけるように直立したまま戻らない。

「私たちは幸い、他に収入の道がありますから」

汐織は女子高生が正気を取り戻す前に、双子姉妹の家を後にした。刺激的すぎる光景に頭がぼーっとしていたが、有益な話を聞く事が出来た。

「来てみてよかったわ」

汐織はつぶやいた。

## 五、決意

奈那に勝手に能力をリセットされる心配がなくなった汐織だが、表情は晴れない。

もう一つの厄介ごと——目黒の件が残っていた。

一回だけならと応じたものの、はたして約束を守ってくれるものか心配だった。そして、その不安は的中した。

断っても断っても、何だかんだと理由をつけて接触してくる。

根負けしたら最後、際限なく利用される羽目になることは分かり切っているから、頑として応じなかった。

別に目黒がどんな『商売』をしていようと構わない。ターゲットの女性にはそれぞれ襲われる理由のあるのだろうし、赤の他人の膾炙まで心配するつもりもない。

でも、自分が関わるのは御免だった。  
 見知らぬ女性を輪姦させたバーの近くには、当分近付けないだろう。女性本人にも、バーのママさんにも顔を見られているから、用心に越したことはない。そんな場所が増えるのは、我慢ならなかった。

「いっそのこと引越して、電話番号も変えて……いや、駄目だわ。だってあの人の能力は『超能力者をサーチすることなんだから』」

あの男のしつこさだ。どこに逃げたところで、早晚見つかってしまう。

リセッター姉妹は、超能力エネルギーは年と共に衰え、四十歳くらいで消滅すると言っていた。

目黒の年齢は知らないが、見かけは三十代半ばか。おそらく自分でも能力の衰えを感じていて、稼げるうちに稼いでおくつもりだろう。

「だからといって、あの人の能力が消えるまで待ってられないし」

目黒といい奈那といい、どうして諦めの悪い人間にまわりつかれるのか。

「もう、本当にリセットしてしまおうかな。そうすればこの煩わしさから解放されるわ」

汐織は心にもないことをつぶやいてみた。

頭に奈那の顔が浮かぶ。

「一度だけ私が奈那の前で犯されれば……」

奈那の気が済めば、それで平安な生活を取り返せる。

でも……

嫌だ。汐織はすぐに首を振った。

あの手この手で接触してくる目黒と、拒絶する汐織。

しつこさと諦めの悪さだけは一流の男だった。

根比べ状態の中で、汐織もストレスがたまって塞ぎがちになる。

いっその事、あの男の言いなりに強姦の片棒を担ぐか……

どこかの知らない女が、目の前で犯されるのを見ているだけで済むんだから、楽なもの

ではないか。

そのうち慣れてしまっても思わなくなるだろう。

それに小遣い稼ぎにもなるし。

悪魔が汐織の耳元にささやく。

ああ、こんな状態にいつまで耐えきれぬだろうか。

何度も根負けしそうになっては持ちこたえる。

そんなある日のこと。

汐織のスマホが鳴った。

目黒だったら出ないつもりで着信画面を見ると、こずえからだった。

「もしもし」

しかし、受話器の向こうから聞こえてくるのは、複数の男女が騒ぐ声だけだった。

「もしもし？ こずえ？」

汐織は眉をひそめて聞き耳を立てた。

騒音の中に悲鳴が混じっている。

ヒィヒィと、途切れがちな細い声。

これは襲われる女の悲鳴だ。汐織は直感した。

ワゴン車の中で犯される奈那の声と同じ。

バーのソファ席で犯される見知らぬ女性の声と同じ。  
それも、襲われた直後の金切り声で叫ぶ段階はとうに過ぎて、散々嬲られて惰性でヒィ声を上げている状態だ。

「こずえ、返事して！」

汐織は叫んだ。

喧嘩に交じって聞こえる悲鳴は間違いなくこずえのものだ。こずえが襲われている。

「まあ落ち着いて下さいよ」

受話器から聞こえたのは目黒の声だった。

汐織は青ざめた。

あの男はとうとうこずえにまで手を出したのだ。

「な、な、な、何のつもりですかっ!？」

「こうでもしないと相手をしてもらえないもので」

「ふざけないで！」

「別に取って食おうって訳じゃない。気持ち良くなっていただけですよ」

目黒が「くくく」と笑った。

「ど、どこにいるんですか。取り返しに行きますっ!？」

後先も考えずに汐織が叫ぶ。

「ほほう、ようやく会っていただけなのですわ。いい返事を期待していますよ」

目黒が告げた住所は、汐織たちのマンションから五分と離れていなかった。  
あの男の自宅なのか事務所なのか知らないが、そんな事はどうでもいい。  
血が上った汐織は乱暴に通話を切ると、取るものも取りあえず飛び出した。

「お会いするのは久しぶりですな」

「こずえを返して！」

目的の建物はすぐに見つかった。

ドアを開けた目黒を押しつけて踏み込み、こずえの姿を探す。

「まあ、こちらへ」

「ちょっと、離してっ！」

汐織は目黒に腕をつかまれたまま、中が騒がしい扉の前を通り過ぎ、奥の小部屋に連れ込まれてしまった。

すぐでもこずえを取り戻したいのに、そうさせてもらえない。

「よほど慌てて駆けつけたようすな。随分とまたラフな格好で」

目黒に言われてようやく自分の格好に気づく汐織。

くつろいだ普段着のままだから、動きやすい短いスカートに素足、しかもTシャツの下はノーブラだ。

飛んで火に入る夏の虫、ということわざが頭をよぎった。  
これでは最悪、姉妹そろって輪姦の憂き目に遭いかねないと気づくが、後には引けな  
い。

「いいからこずえをっ！」

真っ赤になりながら汐織が声を張り上げた。

とにかく、こずえを確保する。

そして一目散に脱出だ。

相手が行動を起こす前に。襲われる前に。

こずえはおそらく丸裸か、それに近い格好だろうけど、身なりを整えている暇はあるま  
い。

一にも二にも、この建物から逃げ出す事を優先しなくては。

そうしないと、二人まとめて犯されてしまう可能性が高いのだ。

複数の男に一旦捕まってしまえば、逃げ出す事はかなうまい。

一か八かの賭になる。

万一捕まってしまったときは、自分が犯され役を引き受けてでもこずえを逃がそう……

「妹さんの様子なら、このモニターでご覧になれますよ。ほら」

目黒に背中を押されて数歩よろめいた先に、豪華なテレビモニターがあった。

「あ……」

汐織は立ちすくんだ。

とっさに映し出されている映像が、どういう状況なのか理解出来ない。

ソファの上でまんぐり返しにされ、剥き出しの女性器を天井に向けた女体。

膣穴には、深々と刺さったバイブ。

捲れ上がった制服のスカートが、腹巻きみたいに腹部にまわりついている。

仰向けで丸くなった体勢なので、スカートのすぐ向こうに大きな乳房が二つ、こんもり

と盛り上がっていた。

隣に座った若い女に揉み回される乳房が、絶え間なく形を変えてひしゃげていた。

バイブを抜き差ししているのは、柄の悪そうな男だ。

「こずえ……」

女の表情を見た時、汐織は膝が崩れそうになった。

映し出されていたのは、だらしなく口元を緩め、よだれを垂らしたアへ顔。

助けを求めて悲鳴を上げてくれたら、どれだけ力が湧いた事か。

「あなたの妹さんだから、期待を込めて能力の有無を調べさせてもらったのですがね  
え」

汐織の背後で目黒がつぶやいた。

「残念ながらただの人ですな。隣に配置した若い女が見えるでしょう？ 自身の身に危  
険が及べば、身代わり能力が発動するかと思っただけです」

目黒は「妹さんからは、かすかに超能力の波動が感じられるのですよ」と付け加えた。「こずえ……どうしてそんな顔を晒しているのよっ」

汐織が床にへたり込んだ。

「彼女の名誉のために言っておきますが、こうなるまではしっかり抵抗なさいましたよ。悲鳴が外に漏れるのではと心配するほどにね」

「くくく」と目黒が笑う。

「む、無理矢理あややって……イカせたんでしょ!!」

「誤解なさらぬように。私が期待したのは、彼女のこういう姿ではないのですよ。隣で彼女の乳房をこねている女が身代わりにされる事です」

「そう言えば……」

汐織がはっと顔を上げた。

奈那たちにワゴン車に引き込まれて犯されかけた日、こずえから助けを求めるメールが届いていた事を思い出した。

「あれも、あなたたちの仕業？ 私が奈那たちに襲われた日に……」

「ああ、あれは段取りが悪くて失敗でした」

目黒はあっさりと認めた。

「サカリのついた馬鹿男がチンポを口に突っ込みたがって、彼女の視界を塞いでくれました。おかげでバイト代が無駄になりましたよ」

「冗談じゃないわ。こずえにまで手をかけるなんてッ!」

汐織は横面の一つでも張ってやろうと立ち上がったが、あっさりといなされた。

「まあまあ、落ち着いて下さいよ。あなたが快く協力してくれば、そんな必要はなかったのですから」

「身勝手な!」

しゃあしゃあと吐かす目黒を睨みつける。

「どうです？ 協力していただけませんかねえ」

「嫌です!」

「どうしても?」

「当たり前ですっ! と、とにかくこずえは連れて帰りますからっ!」

汐織は通せんぼする目黒の脇の下をくぐって抜け出し、先ほど素通りさせられた部屋に飛び込んだ。

「こずえっ!」

駆け寄るが、イカされている真っ最中のこずえは反応しない。

はしたなく膣穴からお汁を飛び散らせて悶え続けるのみ。

クリトリスフードが撚れてめくれ、丸々と膨らんだピンク色のお豆がヒクヒク動いている。た。

こうなるまでに散々クリトリスに集中攻撃を食らった証拠だ。

逃げよう。今すぐに。  
自分一人だけ逃げる？ まさか。  
こずえをここに残して逃げてどうするのだ。  
犯され役を引き受けるつもりではなかったのか。  
でも、こんな連中に犯されたくない。  
その迷いが致命傷になった。  
「ひいっ……」  
男に腕をひねられた。  
あっさり足がもつれて尻餅をつく。  
スカート裾が乱れ、太腿の奥が覗いた。  
「何なの、こいつ」  
「待て。こいつの目を直接見るな」  
手を出そうとした女を目黒が制する。  
そして唐突に真っ暗になった。  
目黒に目隠しをされてしまったのである。  
「よし、いいぞ」

「こずえ起きるのよ、早くッ！」  
乳房をこねている女を突き飛ばして腕を引っ張ってみても、力の抜けた女体は重いだけでまるで動かなかった。  
「何き、あんた」  
女がむかついた顔をした。  
バイブを突っ込んでいた男も、腕を止めて立ち上がる。  
やばい、早く！ 早く！  
捕まったら終わりなのに！  
「こずえっ！」  
汐織はこずえのほっぺたをひっぱたいた。  
ようやく瞼が開いてぼんやりとした目で姉の姿を眺める。  
「……」  
「立って！ 逃げるのよっ！」  
しかしこずえの理性は、快樂モードをさまよったまま目覚めてくれなかった。  
「捕まえろ」  
背後に目黒の声。  
頭の中に警鐘が鳴り響く。  
犯される！ 犯される！

「嫌アァアッ！」  
超能力を封じられた汐織は、たちまちパニックに陥った。  
同じ超能力者である目黒をもっと用心すべきだったのに。  
奈那は欺けても、目黒はそうはいかない。

「ヒィィッ！」  
隣でけたたましい悲鳴を上げてヒン剥きかけられ始めた汐織を、こずえがとろんとした目で見つめていた。

まだ半分夢の中をさまよっているらしく、姉だとは認識出来ていないようだ。

「剥いちゃえ、剥いちゃえ」

「あひいっ！」

こずえが無意識にしがみついてくる汐織の腕を、迷惑そうに避けた。

その腕を女の手が引っぺがして、バンザイした格好に押さえつける。

「そうれっ」

女がTシャツを力任せに引き上げた。

形の良い乳房がブルンと飛び出して、揺れながらこずえのほっぺたに当たった。

「何この女、ブラしてないじゃん」

「あああっ！」

女に乳首を摘ままれた汐織が叫ぶ。

同時に下半身側では、男が暴れる両足と格闘していた。  
短いヒラヒラのスカートなんかたちまち腹の上まで捲れ上がってしまい、むっちりとした生足が剥き出しだ。

激しく抵抗するせいでパンティが摩擦でよれて、『マン肉』が片方はみ出している。

「へへへ。元気のいい女は好きだぜ」

男が蹴飛ばされないように両足の間に身体を割り込ませ、そのまま尻を抱えて股間に顔を埋めた。

「女の匂いだ」

パンティの上から舌先をワレメに沿って這わせる。

「やめてええっ！」

女性器に生暖かい吐息を感じた汐織が悲鳴を上げた。

「もったいぶってないで、マンコ出してやんなよ」

乳首を摘まんでいる女が言った。

場慣れしているようで、要領よく汐織の腕を太腿の下に敷いて、乳房揉み放題の体勢に持ち込んでいた。

「嫌ッ！ 嫌ッ！」

パンティに手をかけられた汐織が身体をよじった。

「あははっ。おっちゃん、こういうバイトなら毎日だって引き受けちゃうよ」

恥毛が露わになっていく様子を眺めながら女が笑う。

「あたしき、学校でパンツ脱がしやってたからさ。ねえ、この子の顔見ちゃ駄目なの？」

「言われた通りにしていればいい」

「ちえっ、焦ってる顔を見てやりたいのにな。ま、いいけどさ」

頭の弱そうな茶髪の女は、汐織の乳房をこっぴどりと揉み回しにかかった。

「嫌ああッ！」

「オッパイばかり気にしていると、マンコ見られちゃうよ？」

乳房を揉みまくられながら、下着を引きずり降ろされる哀れな女体。

下半身が涼しくなったことを察知した汐織が、固く太腿をより合わせてガードした。

「マン毛薄いじゃん。もっとよく見せろよ」

男が手のひらで汐織の恥毛を上にかき上げて、陰裂を正面から晒した。

何をされたか気付いた汐織がジタバタもがくが、隠す手段はない。

「スジマンじゃん」

女が首を伸ばして丸見えになったワレメを覗いて笑う。

「こっちの子の姉ちゃんっすか？ ワレメの長さとか、頭のくぼみの形とかそっくりだけど」

「お前たちは余計な事を知らなくていい」

「……お姉ちゃん？」

ようやく隣で襲われている女が姉であることに気付いたこずえが、気だるそうに頭をもたげた。ゆっくりと瞳に理性の光が戻っていく。

「お姉ちゃんの声だよね？ 何でここへ？」

こずえは女に乳房を揉み回され、男に剥き出しにされた恥部を観察されている汐織の姿を無表情に見つめていたが、ため息をついて天井に視線を移した。「もうやられちゃった後だしどうでもいい」とでも言いたげな様子だ。

「イキ地獄に落としてやれ。徹底的にな」

目黒が低い声で命じた。

「あたしにやらせて。あんた、乳揉み係ね」

茶髪女が嬉しそうに汐織の陰裂の中に指を潜らせ、クリトリスを探ってワレメの中程を掻き混ぜた。

「あひいっ！」

狂ったように足をばたつかせて抵抗する汐織。

その足が三十秒もしないうちに突っ張って広がった。

女の指の間には、摘まみ上げられたクリトリス器官。

「そうれっど」



女が指先を捻ってクリトリスフードをしごく、一瞬でピンク色をした性感神経の塊が露出した。

「ひいひいひいっ！」

クリトリスを剥かれた汐織のけたたましい悲鳴に、こずえが首を回して姉の股間を覗き込んだ。

汐織が頭にかぶせられた袋の下でどんな表情をしているのか窺い知れないが、本能的に『身代わり』を探しているのか、何度も頭を左右に振っていた。

「クリ豆の形までそっくり」

女がクリトリス包皮を押さえてお豆を根元まで剥き上げ、しげしげと眺めた。

自分の事を言われていると気付いたこずえが、顔を赤くして口をとがらせる。

こずえもつい先ほど、この女の指先にクリトリスフードをひとしごきされて、クリトリスを剥かれたばかりだ。

こずえの視線は汐織の股間に向けられたまま動かなかった。

いくら姉妹だって、姉のクリトリスそのものを見るのは初めてだ。言われてみればよく似ている気がした。

「ずいぶんと手慣れた感じだな」

目黒が茶髪女の動きに感心したようにつぶやいた。

「学校でパンツ脱がしやっていたんで。へへへ」

「俺、こいつと同じクラスだったんすけどね。男だろうが女だろうが脱がしまくりっすよ」

汐織の乳房を揉みながら男が笑った。

「これからも使って下さいよ。中退してレディース抜けてから欲求不満たまっちゃって。中学生でもオバサンでもオッケーっす」

茶髪女が抜け目なくアピールする。

「考えておこう」

「クヒィィィッ！」

剥かれた貝柱を直立させられ、裏筋部分をくすぐられる汐織が悲鳴を張り上げた。

「ここくすぐられるのって、女としてアウトっすよ。勝手に股広がって閉じられなくなりますもん」

茶髪女がニヤニヤ笑いながら汐織のクリトリスをつついて意のままにもがかせた。

「乳首、ずっとくすぐって」

男に指示を出して、剥き貝柱をネチネチとなぶり続ける。

女の言うとおおり、汐織は脚を大きく広げたまま自力で閉じられなくなり、太腿に筋を浮かべて叫び続けるしかなかった。

こずえが目と鼻の先で騷り物にされる姉のマンコを、じっと見つめている。

ついさっきまで全く同じ目に遭わされていたのだが、その目つきは興味津々といった様

子だった。

「アヒィィィッ！」

弄られるクリトリス。

そのクリトリスがヒクヒク動くと、接合している小陰唇の『輪』も一緒に動く。そして時折尿道口が収縮し、緩んだ拍子にじわりと小水が漏れた。

「やめてええええっ！ ひいいいいいっ！」

少量の失禁でも、回数が重なればかなりの量になる。

やがて汐織の尻の割れ目からスカートにかけて、大きなシミが出来た。

「クピィィィッ！」

絶叫する汐織の乳暈がぶっくりと盛り上がっていた。

クリトリス本体も、明らかに赤みを帯びて大きくなっている。

「ほら、見たいならよく見ろよ」

男が首を伸ばしているこずえの頭をつかんで引き寄せた。

こずえは鼻がくっつくほどの至近距離で汐織のマンコを見せつけられても抵抗しない。

「アヒィィィィッ！」

けたたましく悲鳴を張り上げ続ける汐織は、仰向けにひっくり返された亀同然だった。

逃れられる可能性なんか全くない。されるがままだ。

「ほうら、ほうら」

剥き豆をくすぐられ、失禁しながら股関節がきしむほどに股を広げてもがく。

「クピィィィィッ！」

「あはは、オシッコだだ漏れ」

茶髪女は汐織の尿道口の収縮を見ながら上手に指先でガードして、失禁の直撃を避けていた。

「クリトリスの裏筋って効くんだよねえ。それとクリサヤの皮の接合部分」

女の指先がクリトリスの根元をぐるりと一周し、裏側の平べったい部分をコチコチコチとくすぐる。

「こずえっ！ こっち見たら……アヒィィィィッ！」

汐織はこずえに見られていると直感して何か叫びたかったようだが、言葉にならなかった。

こずえの目の前に膨らみ切ってツヤを帯びたクリ豆を晒し、意味不明の叫びを上げる。

「ほらほらイッチャえ〜」

茶髪女が容赦なくクリトリスをつつき回す。

「くくっ、この弄られポーズ、妹と同じじゃん。股閉じられなくなって太腿ヒクヒクさせちゃって」

「あああああっ！」

プシャッと音を立てて、かなりの量の小水が噴出した。

「駄目えっ……ひいひいひいっ！」  
 「イッチャっていいんだよ。クリ豆ほじり出された女が我慢出来るわけないんだから」

「ああっ！ はああああっ！」  
 イカされてしまう。恐怖に駆られた汐織が激しく脚を振り乱して抵抗した。

しかしどう暴れたところでマンコの位置は大して動かないから、クリトリスの裏筋をくすぐられる絶望的な状況は変わらない。

「はああああっ！ くきいひいっ！」

「ほうれ、ほうれ」

「アヒイヒイッ！」

猛烈な快感に意識が混濁する。

唐突に汐織の脛の裏に、かつて通勤電車で自分の身代わりにした女の顔が浮かんだ。痴漢にクリトリスを掘り出されて弄られ、ついにはイカされてしまった女のアへ顔。

「ひいっ！ ひいっ！ ひいっ！ ひいっ！ ひいっ！」

あの女性はイカされてなお声を出さなかった。

思う存分悲鳴を上げられる自分はまだ幸せなのだ。

「乳汁が出てきたぜ」

男がぶっくり膨らんだ乳首の先っぽをつついた。

こずえが視線を移して汐織の乳首が湿っていることを確認する。

「くううっ！ ひいひいひいっ！ イクううっ！」

もう限界だ。そう思った瞬間に絶頂がやって来た。

ガクン、ガクン。

太腿を震わせ腰を突き上げる汐織。

「ほうらイカされた」

茶髪女が楽しそうに膣穴の入り口に指を差し込んでかき混ぜた。

肉壺の内側が収縮する様子を見せながら、お汁が一筋あふれ出て尻に垂れる。

「まずは自分が『女』だってことを思い知ることから。エロいことなんか知りませんって顔したお嬢様だって同じだよん」

姉妹まとめてイカせていい気になった茶髪女が講釈を垂れる。

「そう言えばお前って、中坊の頃からレディースに入ってたよな。每晚集まってこんな事してたのか」

乳首をくすぐりながら男が笑った。

「そらだよ。中坊の女の子なんて、気合い入れと称してやられる専門だけどさ。ほらほら、またイキそうかな？」

「ひいひいひいっ！」

断続的にイカされる汐織には何も聞こえていない。  
目黒が注意深く汐織の視線を手で遮るようにして被せられた袋を半分ばかりめくり、効果を確認した。

「くきいいいっ！」

現れたのは、大口を開けて舌を出したアへ顔。

理性なんかかけらも残っていないメスの顔だ。

「きゃははっ、アへってるアへってる。すごい顔」

「気をつける。こいつの目を直接見るな」

「いひいいいっ！ あひいいいっ！」

茶髪女はクリトリスをくすぐる指を片時も止めようとしない。

やがて堰を切ったように汐織の膣穴からお汁が溢れ始めた。

湧き出る大量のお汁が尻の割れ目を伝って流れ落ち、ソファを濡らす。

「一度、徹底的に屈服させておく必要があるな。このまま悶絶させてしまえ」

目黒が低い声で指示を出した。

「アイアイサー」

「くひっ！ あひえええっ！」

膀胱が空になり、小水の漏れが止る。

しかしそれでも肉体は失禁したいらしく、尿道口は口を開いたままだ。

男に摘ままれ通しの乳首は硬く尖り、乳汁が白い乳房を濡らす。

「ひいっ、ひいっ、んひいいいっ！」

「あんた、さっきから何て声出してるのよ……」

呆れた様子でこずえがつぶやいた。

茶髪女は丸々と勃起した汐織のクリトリスを弄り続ける。

同性だけに、まるで容赦ない快樂責めだ。

「くくっ、こうしてイカされてイカされて真っ白になって、それでもイカされて。意識

取り戻しても、腰が抜けて動けないんっすよねえ」

「くああああっ、ひいいいっ！」

「さあて、仕上げはコイツでいくかな」

散々にイカされた汐織の悲鳴がかすれてきた頃、茶髪女がソファの上に転がっているパイプを拾い上げた。

先ほどまで、こずえの膣穴に刺さっていたものだ。

指をV字に開いて汐織の膣穴を剥き、先端をあてがう。

汐織の膨らみ切ったクリトリスが、包皮がめくれたままヒクヒク動いた。

まるで早く「食べさせて」とおねだりしているようだ。

「やらしいねえ、このメス猫」

ヨダレまみれの膣穴にパイプを挿入するのに、力を加える必要はなかった。

軽く押してやるだけで、いとも簡単に太い円柱が穴の中に吞まれていく。  
「あはああああああっ！」

汐織が激しく反応した。

太腿のお肉を震わせながら、股関節が軋むほどに股を広げて腰を突き出す。

「きいいいいいっ！ イクうううううっ！」

「ほうら、何回でもイカせてやるよ」

茶髪女がバイブを抜き差しする度に嬌声を上げる汐織。

「あへええええっ！」

男に摘ままれた両乳首から乳汁が飛び散る。

「見事なイキっぷりだなあ。妹の方以上じゃね？」

「うるさい」

こずえがほっぺたを膨らませてそっぽを向いた。

「お前、イカされてる時のこと覚えてるか？」

こずえは一瞬困惑した表情を浮かべ、ふてくされたように「知らないよ」と呟いた。

「クリトリスを弄られる女なんてそんなものよ」

茶髪女が「ひひひ」と笑う。

「どれ……」

目黒が汐織の目を確認するために、注意深く被せられた袋を更に引っ張り上げた。

「なるほど」

まあ、予想通りと言うか……

汐織の目はあらかた白目がちに反転して、どこにも焦点が合っていなかった。

快樂地獄に丸呑みされたメスの顔。

憎い男の前で、妹の前で、アへってアへってアへりまくるメスの顔。

理性が働いていないから、能力が発動することはない。

「頑固な女だったが……くくく、堕ちたな」

目黒がほくそ笑んだ。

「イクうううううううっ！ あああああああっ！」

「こいつの力があれば、仕事がかどる」

汐織は昔の幻を見ていた。

怪しげな研究所の診察台の上。

あの時も目隠しをされてしまっって何も見えなかった。

またあぁなっってしまうのだからか。

漏らした小水と、白っぽいお汁が飛び散った診察台。

あれは全部、自分の身体から出たものだ。

理性を保とうと頑張っても何も見えず、猛烈な快感が女性器を中心に全身の神経を駆け巡って脳髓に殺到する。

茶髪女の指先に弄ばれながら、中学生の自分と現在の自分が混ざり合い、何もかにもがひとつに溶けていく。

抗いようもない、圧倒的な快樂の大波だ。

あの時と同じ。

でもおそらく、夢を見ていられたのは、最初にイカされてから意識が飛ぶまでのほんの短い間だったろう。

その後は、混沌カオスの彼方だった。

何も記憶に残っていない。

重たいまぶたを開けた時、汐織はそこが自分のベッドである事に気付くまで、長いことかかった。

丸裸で大の字に横たわり、何もかも丸出し。

こずえの声が聞こえていた気がする。

股関節の筋が突っ張って痛い。

のろのろと股間に指を伸ばして探してみると、綺麗に掃除されて乾いていた。

あんな目に遭った後だ。膣穴はお汁が溢れてひどい有様だったに違いない。

「……」

こずえに手当てされたのだろうか。

気を失ったまま妹にマンコを開かれ、中身の柔らかい部分を丁寧に拭われる哀れな姉。

こずえを助けるつもりで勇ましく乗り込んだ結果がこれだ。

女性器を洗いざらい晒して弄られた挙げ句、こずえにも目黒にも合わせる顔がなくなっただけ。

汐織は頭を振って顔を覆った。

「……もういい、リセットしてもらおう。私に出来る抵抗はそれしかないんだわ」  
こんな能力、いらない。  
目黒という男は、奈那よりもずっと危険だ。

## 六. リセット

双子姉妹宅のリビング。

かつて三つ編みの女子高生が悶え狂っていたソファの上には、スカートを臍の上まで捲かれた別の女体が。

女性器剥き出しで綺麗にクリトリス包皮を裏返され、ピンク色のお豆をひくつかせていた。

「あゝあゝあゝっ！ ひいひいひいっ！」

姉の由里にクリトリスを弄られ、舐められてアへっているのは、言うまでもなく汐織だ。

土壇場で怖じ気づいて抵抗したらしく、床に耖られた下着とストッキングが散らばり、ジュースのボトルがひっくり返っていた。

妹の絵里が汐織の上半身に馬乗りになって体重をかけ、姉の由里が脚の間に入り込んで尻を抱え、マンコに指を伸ばしているのだった。

「あはあああああっ！」

どれだけ我慢できたのか分からないが、ともかく汐織は陥落させられ、膣穴から大量のお汁を溢れさせて正気を失っていた。

「うふふ、手こずらせてくれる子は好きよ」

絵里に摘ままれた乳首の先端から、シュッと糸のように乳汁が飛ぶ。

「頑張って抵抗したのに、残念だったわねえ」

「汐織さんは能力値が高いから、完全に抜くには時間がかかりそう」

姉の由里が汐織のクリトリスを揉み込んで吸い付く動きを繰り返す。

おかげで汐織はイキっぱ状態となり、失禁して尿道口が開き切ってしまった。

こんな能力、いらぬ——それはその通りだが……

目黒たちに襲われた汐織は、すぐにリセッターを訪れたわけではなかった。

決心はしたが、実際に『どうされるのか』知っている以上、なかなか行動に移せなかったのである。

行けば、自分もあの女子高生と同じ姿になる。

もしくは目黒たちにイカされまくったあの忌まわしい状況の再現になる。

リセッターの双子姉妹に女性器を差し出しに行くのと同義なのだ。

実質は嬲り者。

いくら善意の同性だって、正直それは悔しい。

女はクリトリスを弄られたら終わり。

あの女子高生がされていたみたいにクリトリスに吸い付かれて、狂わずにいられる自信はなかった。

いや百パーセント、自分だってあなる。

それが分かっているから、色々と理由をつけては先延ばしにしていた。

その間、目黒に言われるままに輪姦の片棒を担ぐこと三度。目の前で自分の代わりに襲いかかられ、たちまち剥き出しにされる女性器、女性器、女性器。陰裂を広げられ、膣穴を剥かれて悲鳴を上げる見知らぬ女性たち。

このままではいつまでも利用されてしまう。

あの連中と関わっていれば、いつまたこの間みたいな目に遭わないとも限らない。どこかに逃げたところで、目黒はサーチ能力があるから早晚見つかってしまおうだろう。まるで蟻地獄だ。

「あんた、またあの事考えてるでしょ」

うじうじしている汐織と対照的に、こずえは事件など忘れたかのようだった。

「さっさとリセットして引越してしまえばいいだけなのに」

「でもあの男は……」

「あいつって、超能力者を見つける超能力者なんですよ。だったら、あんたが超能力者でなくなれば見つけようがないじゃん。あたしはただの女の子らしいし」

こずえはあっさりと言うのだった。

「それはそうだけど……」

「あんたってさ、一年経っても襲われた時のこと考えていそうだよ。もっと前向きに

生きようよ」

「だって……こずえは平気なの？ あ、あんな事されて……」

「うーん、悩んだって襲われた事実が変わるものでもないし」

「……」

確かにこずえの言う通りだろう。座して思い悩むのではなく、解決するために動かなければ意味がないのだ。

「ま、変な超能力のせいであんな奴らが寄ってくるなら、消してもらった方がいいと思うよ」

「そうよね……そうしようかな」

よし、リセットしてしまおう。

汐織は心に決めた。

「リセッターかあ、いろんな超能力があるんだね。どんな事するんだろ。あたし、付き添ってあげるよ」

「い、い、いい。一人で行くから」

「そう？」

こずえの前での『惨状』を晒すのは、姉の沽券に関わる。汐織は真っ赤になって手を振った。

「……」





ない。

チュウとクリトリスを吸われると、声も出せないほどの快感に全身を痙攣させるのだった。

そしてやがて、体力の限界に達した汐織が白目を剥いて悶絶した。

それでもまだ『氣』が抜けきっておらず、由里の指先はクリトリスを弄り続ける。

「これでもうやく三分の一の言ったところかしらね。この方、能力が強いからあと三回か四回はかかりそう」

さて、颯り倒されて目覚めた汐織だが、一度で終わらなかったと聞いて絶句した。

それでも覚悟を決めたのだからと自分に言い聞かせて、レズ姉妹に女性器を差し出す。

昼も夜もソファの上でクリトリスを摘まみ転がされ、正体なくメス堕ちさせられる繰り返し。

ようやく完了を告げられた時には、立ち上がることもままならない有様だった。

その後、目黒がどうなったのか汐織は知らない。

リセッター姉妹の好意で、所有するマンションの一室に住まわせてもらえることにな

り、すぐにこずえを連れて引っ越したからである。

何と、レズ姉妹は地方都市の名家の跡取り娘であった。

汐織が忽然と姿を消してサーチ不能なのだから、地団駄踏んで悔しがったであろうことは想像がつく。

一方の奈那だが、ある時汐織は男性誌のグラビアに載っているのを見つけて仰天した。

調べたところ、A V女優をやっているしかも結構な人気らしい。

記事によると、別件で訪ねた事務所がA Vプロダクションを兼ねていて、思い切って挑戦してみたら大当たりだったそうさ。

汐織は事務所の住所を見て納得した。例の『相談無料』だったからである。

実際は「思い切った挑戦してみた」のではなく、「無理矢理裸の写真を撮られて仕方なく」やってみたら当たったのだろう。

経緯はさておき奈那本人が「今、輝いています」と笑っているし、その笑顔は本物だった。だから結果オーライである。

「あんた、ずいぶん嬉しそうじゃん」

こずえがリセット後の定期検診に向かう汐織をからかう。

汐織の能力は強力なので、当分は『氣』がジワジワと回復してしまおうそうさ。だから、



無断転載・複製・複写・  
Web上へのアップロード禁止



成人向け作品につき  
18歳未満閲覧禁止

定期的に抜いてやらないとならないのである。  
「嬉しいはずないでしょ。大変なんだから」  
お気に入りの下着に着替え、いそいそと出かけていく汐織。  
こちらはこちらで、何かに目覚めたようだった。

発行日 平成二十八年八月十日  
著作・発行 サークル小愚者

完